

平安京左京五条三坊五町
烏丸綾小路遺跡

2013年

古代文化調査会

例 言

1. 本書は、古代文化調査会が京都市下京区新町通高辻下る御影町において、株式会社ゼロ・コーポレーションによるマンション建設に伴い実施した平安京左京五条三坊五町・烏丸綾小路遺跡（12H336）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、株式会社ゼロ・コーポレーションより委託を受けた古代文化調査会の水谷明子が担当し、家崎孝治が補佐した。
3. 調査にあたっては、京都市文化市民局文化財保護課の指導を受けた。
4. 本書の編集・執筆は水谷がおこなった。
5. 図面及び遺物整理は、板谷桃代、水谷が分担し、製図は水谷が担当した。
6. 本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系VIによる。
7. 本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の2,500分の1の地図（三条大橋・壬生・鳥原・五条大橋）、国土地理院発行の25,000分の1の地図（京都西南部）を調整し、使用した。
8. 土壌及び土器・瓦類の色調の表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
9. 遺構番号は実測図・写真ともに共通している。
10. 発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

家原圭太 石田恵一 井上 賢 今吉 毅 宇野隆志 馬瀬智光 奥井智子 梶川敏夫

北田栄造 鈴木久史 清水 聡 西森正晃 長谷川行孝 早瀬公康 堀 大輔

宮原健吾 三好勝人 森 郁夫

（株）明輝建設 （株）大高建設 （公財）京都市埋蔵文化財研究所

（株）東洋設計事務所 （株）中川工務店 （株）ゼロ・コーポレーション

本文目次

平安京左京五条三坊五町・烏丸綾小路遺跡

I	調査の経緯	1
II	遺構	7
III	遺物	14
IV	まとめ	32

図版目次

図版 1	遺跡	1	東半部第 1 面全景 (東から)
		2	東半部第 2 面全景 (東から)
図版 2	遺跡	1	東半部第 3 面全景 (東から)
		2	土壇34 (南から)
図版 3	遺跡	1	東半部溝200 (西から)
		2	東半部南西部柱穴群 (北東から)
図版 4	遺跡	1	西半部第 1 面全景 (東から)
		2	西半部第 2 面全景 (東から)
図版 5	遺跡	1	西半部第 3 面全景 (東から)
		2	石組294 (北から)
図版 6	遺跡	1	溝305 (南から)
		2	西半部溝200 (東から)
図版 7	遺跡	1	溝200西端部 (南東から)
		2	柵 3・溝433 (北から)
図版 8	遺跡	1	土壇500焼け瓦出土状況 (東から)
		2	溝433 (南東から)
図版 9	遺物	落ち込み578・埋納遺構577・溝200出土遺物	
図版 10	遺物	溝200・柱穴409・土壇396出土遺物	

- 図版11 遺物 土壙34・11・26・10出土遺物
- 図版12 遺物 土壙10・溝200第1層・土壙307・溝200北肩・柱穴336・溝200第2層・土壙356出土遺物
- 図版13 遺物 溝200第1・2層・土壙500・419出土遺物
- 図版14 遺物 溝200第1層・土壙500・430・414・11・16・溝305最下層出土遺物
- 図版15 遺物 溝305精査中・石組294掘形・土壙42・165・溝200西端部・土壙348出土遺物

挿 図 目 次

図 1	調査地点位置図	1
図 2	調査地位置図	2
図 3	平安京条坊と調査地位置図	2
図 4	四行八門と調査位置関係図	2
図 5	北壁断面実測図	4
図 6	南壁断面実測図	5
図 7	東・西壁断面実測図	6
図 8	第1～3面遺構実測図	8
図 9	落ち込み578範囲図	9
図10	溝200断面実測図	10
図11	溝200遺物出土状況実測図	10
図12	柵1～4実測図	12
図13	溝433 X-110,964ライン断面実測図	12
図14	土壙34遺物出土状況実測図	13
図15	石組294実測図	13
図16	落ち込み578・埋納遺構577出土遺物実測図	14
図17	溝200出土遺物実測図(1)	15
図18	溝200出土遺物実測図(2)	16
図19	溝200出土遺物実測図(3)	17
図20	溝433出土遺物実測図	19
図21	土壙500・柵1・3・溝340・土壙348・柱穴409出土遺物実測図	20
図22	土壙396・359・362・187出土遺物実測図	21
図23	溝305・304・井戸345出土遺物実測図	22
図24	土壙34・11・244・29出土遺物実測図	23
図25	石組294・土壙26・10出土遺物実測図	24

図26	墨書土器実測図	25
図27	有孔磚拓影・実測図	25
図28	軒瓦・平瓦拓影・実測図	26
図29	石製品実測図（1）	28
図30	石製品実測図（2）	29
図31	堰石実測図	29
図32	錢貨拓影図	31
図33	金属製品実測図	31

平安京左京五条三坊五町・烏丸綾小路遺跡

I 調査の経緯

調査に至る経緯

調査地は京都市下京区新町通高辻下る御影町455他である。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地・平安京跡の左京五条三坊五町跡にあたり、また、弥生時代から古墳時代の集落跡・烏丸綾小路遺跡に含まれるところである。2012年12月、当地に株式会社ゼロ・コーポレーションによるマンション建設の計画がなされ、工事に先立ち京都市文化財保護課が試掘調査を実施した。試掘調査の結果、地表下1mにおいて平安時代の遺構が良好な状態で遺存していることが判明し、発掘調査の必要性が考慮されるに至った。京都市の指導の下、当調査会と施主との協議の結果、当調査会が発掘調査をおこなうこととなった。調査は2013年1月中旬より開始することとなった。

調査経過

当該地は、平安京左京五条三坊五町及び烏丸綾小路遺跡に相当する。調査対象地は西側が町尻小路、東側が室町小路、北側が高辻小路、南側が五条大路に囲まれたところで、五町の西端中央

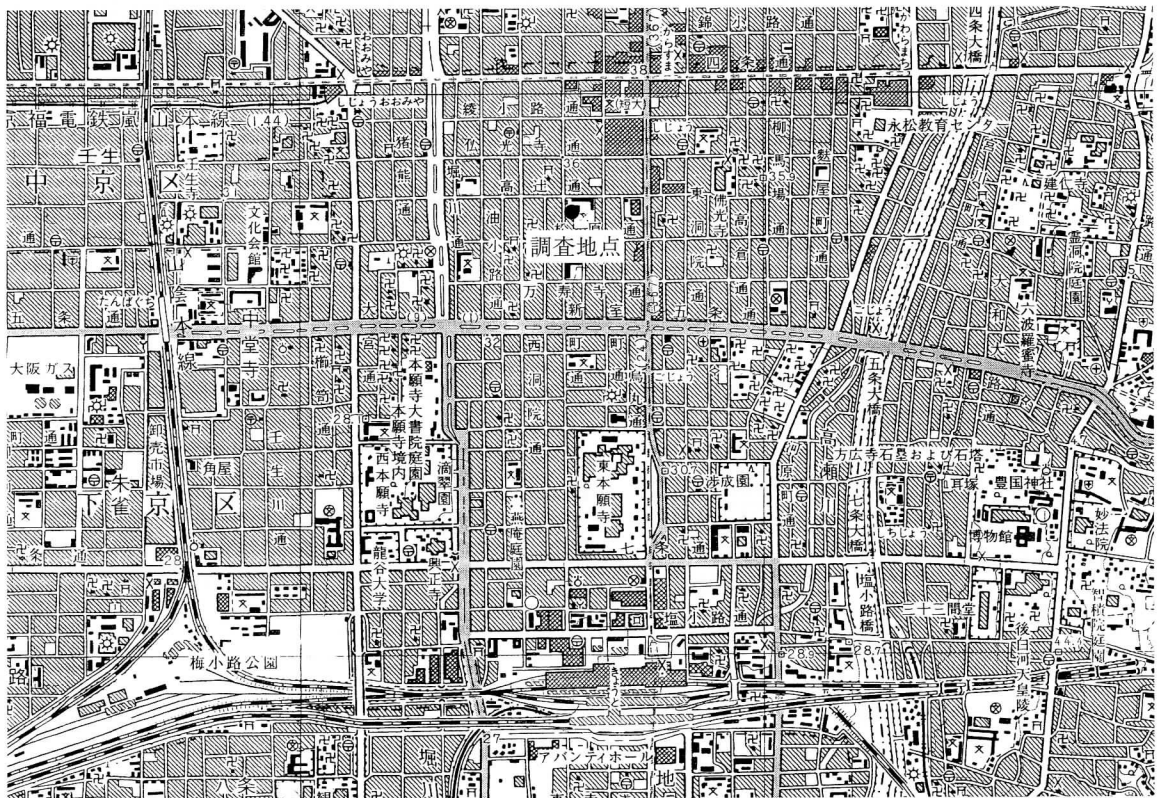


図1 調査地点位置図 (1/25,000)

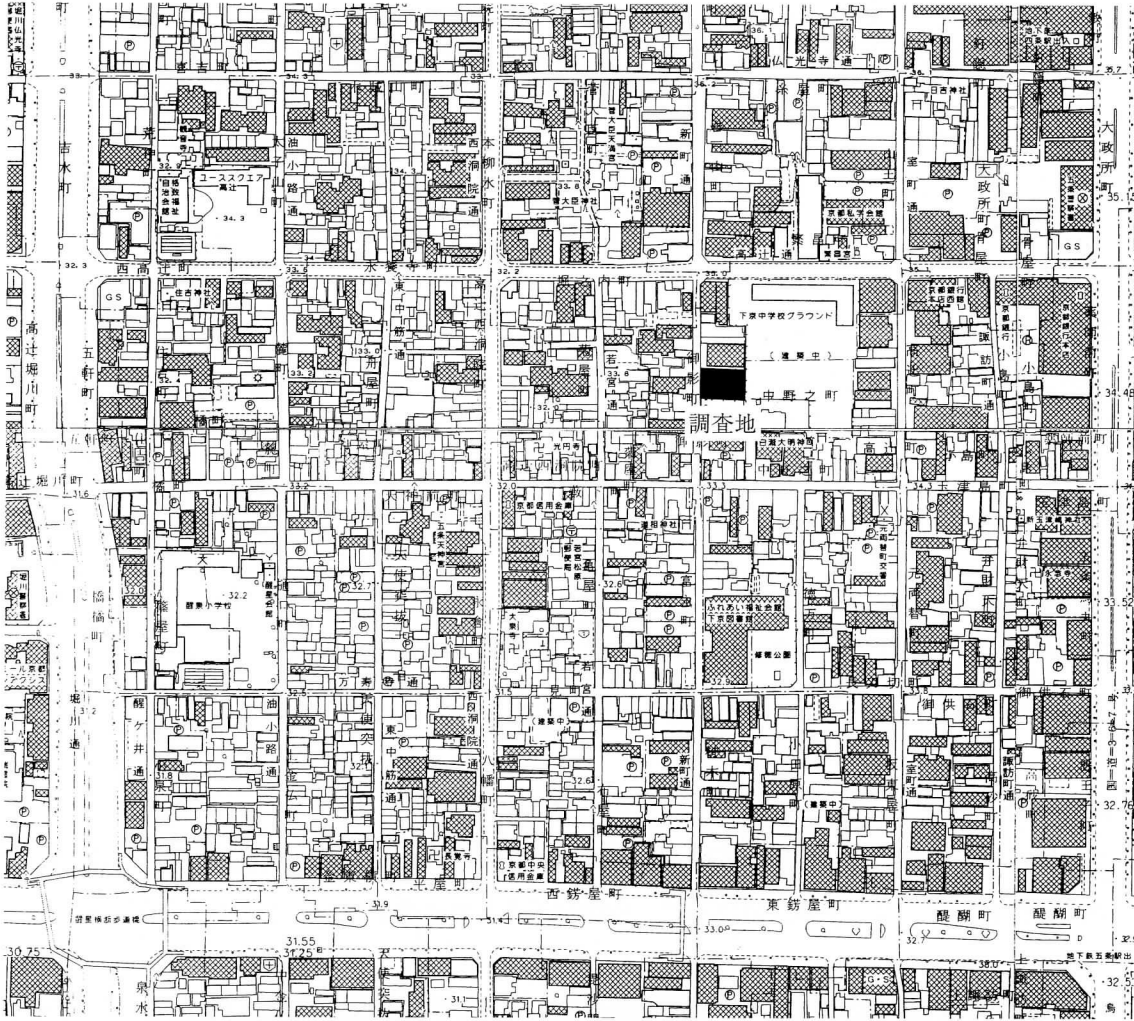


図2 調査地位置図 (1/5,000)

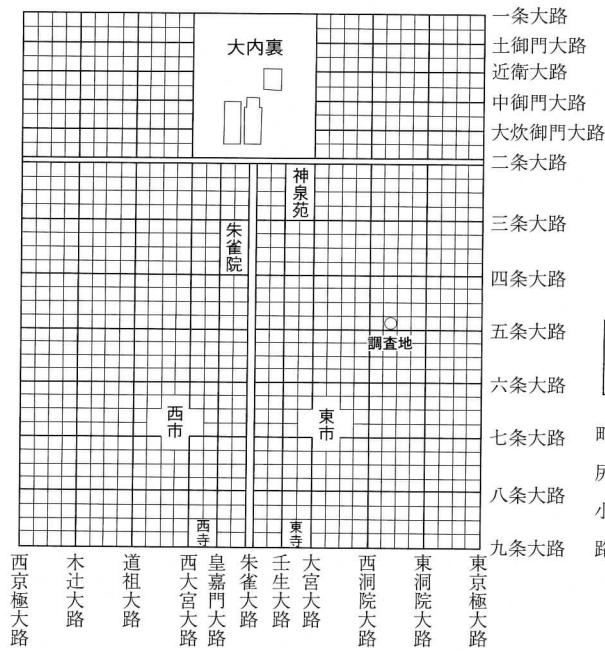


図3 平安京条坊と調査地位置図

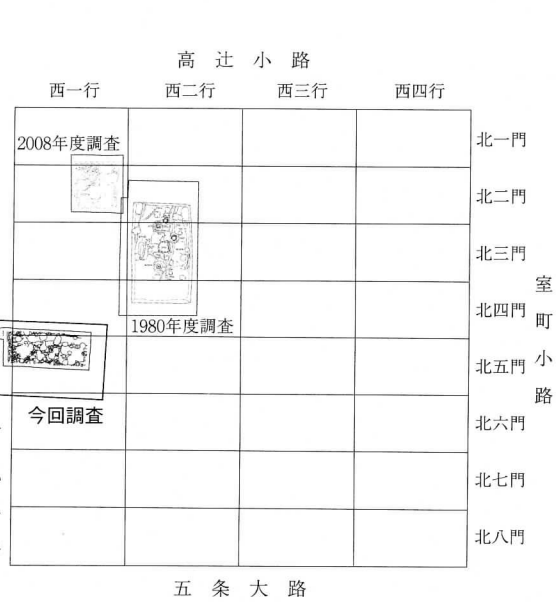


図4 四行八門と調査位置関係図 (1/2,000)

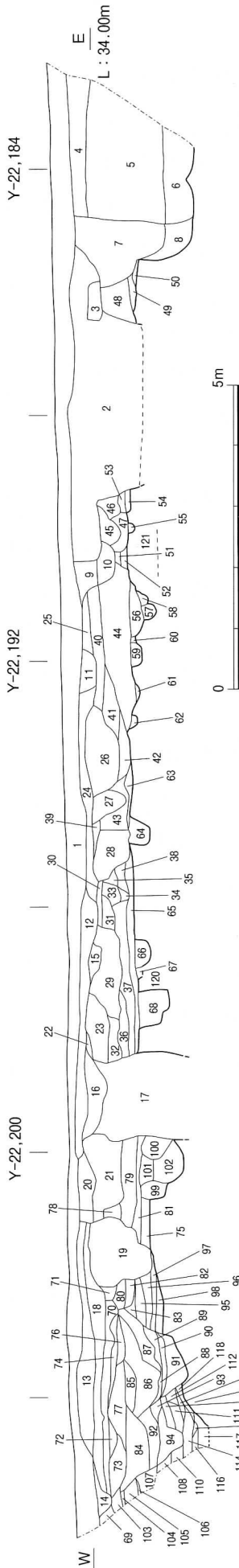
部の西一行北四・五門に相当する。^{註1}平安時代にこの地に邸宅の記述は見られないが、室町時代には元は五条橋西詰南側にあった御影堂新善光寺が享禄2年（1529）当町に堂宇を再建し、天正15年（1587）秀吉の命で六条坊門京極の南に移転するまで所在したことが文献の記録として残っている。新善光寺は浄土宗の一派である時宗に属し、本尊は安阿弥快慶作という阿弥陀如来である。

この五町においては過去に2カ所の発掘調査（図4）が実施されている。1980年の調査^{註2}では弥生時代末から古墳時代初めの土器を包含する竪穴住居・土壇跡が検出された。2008年の調査^{註3}では弥生時代末から古墳時代初めの流路、平安時代後期から室町時代の井戸や土壇、桃山時代から江戸時代の井戸や土壇跡等が検出されている。今回の調査地は過去2回の調査地の南西部にあたり、平安時代以降の五町の様相を知るとともに弥生時代末から古墳時代初めにかけての遺構の確認も念頭におき調査を実施した。

実際の調査においては敷地内に全ての土砂置き場を確保することが困難であったため、一部土砂を場外搬出することとした。調査区を東半部と西半部の二分割にし、東半部より2013年1月23日から調査を開始した。試掘調査の結果を踏まえ、盛土及び攪乱層を機械力によって除去したのち調査に着手した。東半部西半部ともに3面の調査をおこなった。東半部は2月27日まで調査をおこない、終了後すぐに埋め戻した。引き続き西半部の調査に着手し、現場作業は3月28日に終了した。調査面積は233㎡、実働日数は48日間であった。

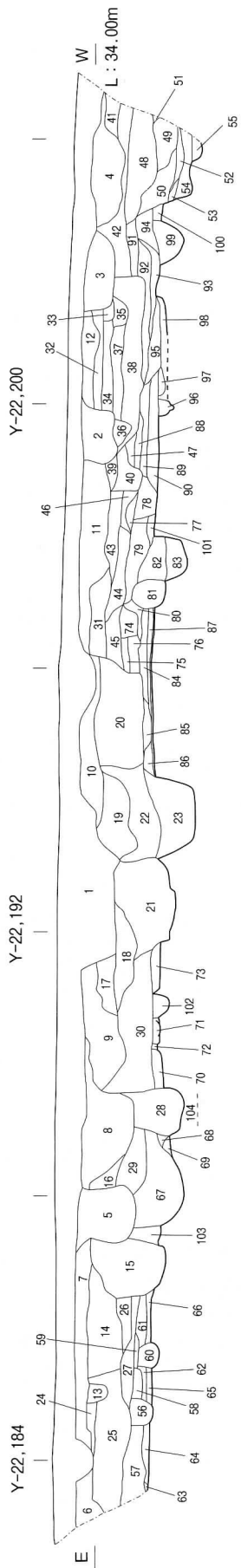
調査の方法としては、（財）京都市埋蔵文化財研究所が作成した平面直角座標系VIによる平安京の復原モデル60を使用し、調査区の北東角を原点とする、東西方向にアラビア数字を南北方向にアルファベットを記号として付し、4mメッシュのグリッドを基本とする遺構遺物の記録をとる方法をおこなった。五町における築地四隅の座標値（新測地系）は次の通りである。

北西	X = -110,904.54m	北東	X = -110,904.05m
	Y = - 22,203.02m		Y = - 22,083.63m
南西	X = -111,023.92m	南東	X = -111,023.44m
	Y = - 22,202.53m		Y = - 22,083.14m



- 1 砕石・盛土及び攪乱
- 2 10YR2/2黒褐色泥
- 3 漆喰
- 4 2.5Y5/2暗灰黄色砂礫 (φ 1 ~ 10cm礫混)
- 5 10YR3/2黒褐色砂泥 (礫混)
- 6 10YR2/2黒褐色砂泥 (泥質)
- 7 2.5Y5/3黄褐色砂礫と10YR3/2黒褐色砂泥の互層
- 8 2.5Y5/3黄褐色砂礫 (φ 1 ~ 5 cm礫混)
- 9 10YR3/2黒褐色砂泥
- 10 10YR3/2黒褐色砂泥 (炭混)
- 11 10YR3/2黒褐色砂泥 (炭・焼土混)
- 12 7.5YR3/3暗褐色砂泥 (焼土多量)
- 13 5YR4/8赤褐色砂泥 (焼土多量・炭混)
- 14 5YR4/8赤褐色砂泥 (焼土多量混)
- 15 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 16 5YR4/8赤褐色砂泥 (焼土多量・炭混)
- 17 2.5Y6/3にぶい黄色砂礫 (焼土多量・炭混)
- 18 10YR3/2黒褐色砂泥
- 19 10YR3/2黒褐色砂泥
- 20 10YR5/2灰黄褐色砂泥 (瓦多量混)
- 21 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 (焼土)
- 22 10YR3/2黒褐色砂泥
- 23 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (礫混)
- 24 10YR3/2黒褐色砂泥 (炭・焼土混)
- 25 10YR3/2黒褐色砂泥 (炭・焼土混)
- 26 10YR3/2黒褐色砂泥 (φ 5 ~ 10cm礫・炭混)
- 27 10YR3/2黒褐色砂泥 (炭・焼土混)
- 28 10YR3/2黒褐色砂泥 (礫混)
- 29 10YR3/3暗褐色砂泥 (礫混)
- 30 2.5Y5/3黄褐色砂泥 (塗地上)
- 31 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (礫混)
- 32 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (礫混)
- 33 10YR5/2灰黄褐色砂泥
- 34 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 35 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 36 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥
- 37 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (礫混)
- 38 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 39 10YR3/3暗褐色砂泥 (焼土混)
- 40 10YR3/2黒褐色砂泥 (炭・焼土混)
- 41 10YR3/2黒褐色砂泥 (炭混)
- 42 2.5Y3/2黒褐色砂泥 (炭混)
- 43 10YR3/2黒褐色砂泥 (焼土混)
- 44 10YR3/2黒褐色砂泥 (φ 2 ~ 10cm礫混)
- 45 10YR3/2黒褐色砂泥 (礫混)
- 46 10YR3/2黒褐色砂泥 (炭混)
- 47 2.5Y3/2黒褐色砂泥 (土器多量・炭混) (土器34)
- 48 10YR2/2黒褐色砂泥
- 49 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
- 50 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥
- 51 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 52 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 53 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 54 2.5Y5/3黄褐色砂泥
- 55 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 56 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 57 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 58 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
- 59 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 60 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 (礫混)
- 61 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 62 2.5Y5/3黄褐色砂泥
- 63 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
- 64 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (礫混)
- 65 2.5Y5/3黄褐色砂泥
- 66 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (炭混)
- 67 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 68 2.5Y5/3黄褐色砂泥 (炭混)
- 69 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 70 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥
- 71 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (礫混)
- 72 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 73 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 (礫混)
- 74 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 75 2.5Y5/3黄褐色砂泥
- 76 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 77 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 (礫混)
- 78 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 79 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (礫混)
- 80 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (礫混)
- 81 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 82 10YR3/2黒褐色砂泥 (炭混)
- 83 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (礫混)
- 84 10YR5/2灰黄褐色砂泥 (φ 3 ~ 10cm礫混) (溝304)
- 85 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 (小礫混)
- 86 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 (φ 8 ~ 20cm礫混)
- 87 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 88 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
- 89 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
- 90 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 91 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 (礫混)
- 92 10YR5/2灰黄褐色砂泥 (小礫混) (溝340)
- 93 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 94 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (小礫混)
- 95 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 (礫混)
- 96 2.5Y3/2黒褐色砂泥 (φ 1 ~ 4 cm礫多量混)
- 97 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 (礫混)
- 98 10YR4/2灰黄褐色砂礫 (φ 2 ~ 5 cm礫混)
- 99 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 (炭混)
- 100 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 101 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 102 2.5Y5/3黄褐色砂泥
- 103 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 104 10YR3/3暗褐色砂泥 (小礫多量) (路面)
- 105 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (φ 1 ~ 10cm礫多量混)
- 106 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (小礫多量混) (路面)
- 107 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (φ 1 ~ 8 cm礫多量混)
- 108 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 (小礫混)
- 109 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 110 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 111 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 112 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 (堅緻)
- 113 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 (堅緻)
- 114 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (砂質・鉄分沈着)
- 115 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
- 116 7.5Y3/1オリーブ黒色泥土 (植物遺体含む)
- 117 5Y3/1オリーブ黒色泥土
- 118 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 (堅緻)
- 119 10YR4/1暗灰黄色砂礫 (粘土混) (地山)
- 120 10YR6/2灰黄褐色砂泥 (地山)
- 121 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 (ベース)

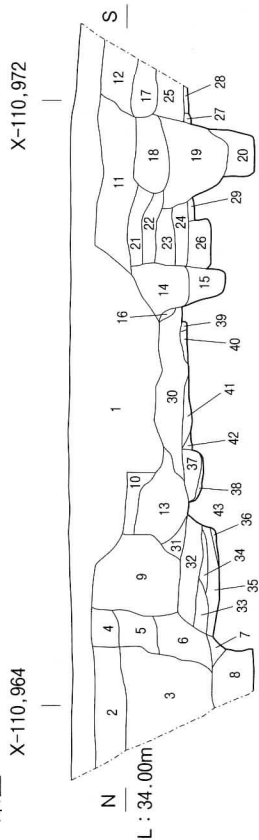
図5 北壁断面実測図 (1/100)



- | | | | |
|--|--------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------------|
| 1 碎石・盛土及び攪乱 | 29 2.5Y3/2黒褐色砂泥 | 57 10YR2/2黒褐色泥砂 | 81 10YR3/2黒褐色砂泥 |
| 2 10YR3/3暗褐色泥砂 (φ 5 ~ 20cm礫多量混) | 30 10YR4/2灰黄褐色砂泥 | 58 10YR2/2黒褐色砂泥 | 82 10YR2/2黒褐色砂泥 |
| 3 7.5YR4/3褐色泥砂 (焼瓦多量混) | 31 10YR3/2黒褐色砂泥 (整地層) | 59 2.5Y3/2暗褐色泥砂 | 83 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 |
| 4 7.5YR4/3褐色泥砂 (焼瓦多量混) | 32 10YR3/2黒褐色砂泥 | 60 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 | 84 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 (炭混) |
| 5 10YR3/2黒褐色泥砂 (礫・漆喰・焼土混) | 33 10YR3/2黒褐色砂泥 | 61 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂 | 85 10YR4/2灰黄褐色砂泥 |
| 6 10YR3/2黒褐色泥砂 (焼瓦多量混) | 34 10YR3/3暗褐色砂泥 | 62 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂 | 86 10YR3/2黒褐色砂泥 |
| 7 10YR3/2黒褐色泥砂 (漆喰・焼土・炭混) | 35 10YR3/3暗褐色砂泥 | 63 10YR3/2黒褐色砂泥 | 87 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂 (下に厚さ約1cmの石敷き(略面)) |
| 8 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (炭・焼土混) | 36 10YR3/2黒褐色砂泥 | 64 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂 | 88 10YR3/2黒褐色砂泥 |
| 9 10YR3/2黒褐色砂泥 (漆喰・貝殻混) | 37 10YR2/2黒褐色砂泥 (礫・炭混) | 65 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂 | 89 10YR3/2黒褐色砂泥 (焼土・炭混) |
| 10 2.5Y3/2黒褐色砂泥 (炭多量) | 38 10YR3/1黒褐色砂泥 | 66 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 | 90 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 (焼土・炭混) |
| 11 10YR3/3暗褐色砂泥 (焼土・焼瓦混) | 39 10YR3/2黒褐色砂泥 | 67 2.5Y3/2黒褐色泥砂 (礫混) | 91 10YR2/2黒褐色砂泥 (炭混) |
| 12 10YR2/2黒褐色砂泥 (焼土混) | 40 10YR2/2黒褐色砂泥 | 68 10YR3/2黒褐色砂泥 | 92 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂 |
| 13 10YR3/2黒褐色泥砂 (φ 2 ~ 10cm礫多量混) | 41 10YR3/2黒褐色砂泥 | 69 2.5Y3/2黒褐色砂泥 (礫混) | 93 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 |
| 14 10YR3/2黒褐色泥砂 (漆喰・焼土・炭・φ 1 ~ 10cm礫多量混) | 42 10YR3/2黒褐色砂泥 | 70 2.5Y3/2黒褐色泥砂 (焼土混) | 94 10YR3/2黒褐色砂泥 |
| 15 10YR3/2黒褐色砂泥 | 43 10YR3/2黒褐色砂泥 | 71 10YR3/1黒褐色砂泥 (土礫187) | 95 10YR3/2黒褐色砂泥 (炭混) (土礫307) |
| 16 10YR3/2黒褐色砂泥 (漆喰・焼土・炭・φ 1 ~ 8cm礫多量混) | 44 10YR3/2黒褐色砂泥 | 72 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 | 96 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 |
| 17 10YR3/2黒褐色砂泥 (炭・礫混) | 45 10YR3/2黒褐色砂泥 | 73 2.5Y3/2黒褐色泥砂 | 97 10YR4/2灰黄褐色砂泥 |
| 18 10YR3/1黒褐色砂泥 | 46 10YR4/2灰黄褐色砂泥 | 74 10YR3/2黒褐色砂泥 (炭混) | 98 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 |
| 19 2.5Y3/2黒褐色泥砂 (φ 1 ~ 8cm礫多量混) | 47 10YR2/3黒褐色砂泥 | 75 10YR2/2黒褐色砂泥 (炭混) | 99 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 |
| 20 10YR2/2黒褐色砂泥 (炭・漆喰混) | 48 10YR3/2黒褐色砂泥 | 76 10YR2/3黒褐色砂泥 (炭混) | 100 10YR3/2黒褐色砂泥 |
| 21 2.5Y3/2黒褐色砂泥 (礫混) | 49 2.5Y3/2黒褐色砂泥 (φ 5 ~ 20cm礫混) | 77 10YR3/2黒褐色砂泥 | 101 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 |
| 22 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 井戸44 | 50 2.5Y3/2黒褐色砂泥 | 78 10YR2/2黒褐色砂泥 (炭混) | 102 2.5Y3/2黒褐色砂泥 |
| 23 10YR3/2黒褐色砂泥 | 51 10YR3/2黒褐色砂泥 | 79 10YR3/2黒褐色砂泥 + 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥 | 103 10YR4/2灰黄褐色砂泥 |
| 24 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 | 52 2.5Y3/2黒褐色泥土 | 80 10YR3/3暗褐色砂泥 | 104 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 (ベース) |
| 25 10YR3/2黒褐色泥砂 (炭混) | 53 10YR3/2黒褐色砂泥 | | |
| 26 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (礫混) | 54 10YR3/2黒褐色砂泥 | | |
| 27 10YR3/1黒褐色泥砂 (炭混) | 55 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 | | |
| 28 2.5Y3/2黒褐色砂泥 | 56 10YR2/2黒褐色砂泥 (φ 3 ~ 10cm礫混) | | |

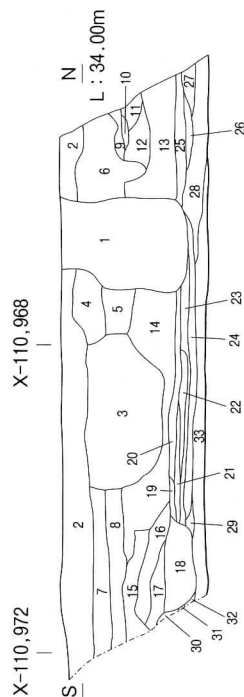
図6 南壁断面実測図 (1/100)

東壁



- 1 碎石・盛土及び攪乱
- 2 25Y5/2暗灰黄色砂礫 (φ 1~10cm礫混)
- 3 10YR3/2黒褐色砂泥 (礫混)
- 4 10YR3/2黒褐色砂泥 (焼土・炭混)
- 5 10YR3/2黒褐色砂泥 (漆底混)
- 6 10YR3/2黒褐色砂泥
- 7 25Y4/2暗灰黄色砂泥
- 8 10YR2/2黒褐色砂泥 (泥質)
- 9 25Y5/3黄褐色砂泥(φ 1~5 cm礫) と 10YR3/2黒褐色砂泥の互層
- 10 10YR2/3黒褐色砂泥 (礫混)
- 11 10YR3/2黒褐色砂泥 (焼土多量混)
- 12 10YR3/2黒褐色砂泥 (礫・漆喰・焼土混)
- 13 10YR2/2黒褐色砂泥
- 14 10YR3/3暗褐色砂泥
- 15 10YR3/1黒褐色砂泥 (炭混)
- 16 25Y5/4黄褐色砂泥 (炭混)
- 17 10YR3/2黒褐色砂泥 (炭混)
- 18 10YR2/2黒褐色砂泥
- 19 10YR2/1黒褐色砂泥
- 20 25Y3/2黒褐色砂泥
- 21 10YR3/1黒褐色砂泥
- 22 10YR2/2黒褐色砂泥 (礫混)
- 23 10YR3/1黒褐色砂泥
- 24 10YR3/2黒褐色砂泥
- 25 10YR2/2黒褐色砂泥
- 26 25Y4/2暗灰黄色砂泥
- 27 25Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 28 25Y4/2暗灰黄色砂泥
- 29 25Y4/2暗灰黄色砂泥
- 30 25Y3/2黒褐色砂泥
- 31 25Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 (炭多量・焼土混) (溝200)
- 32 25Y3/2黒褐色砂泥 (炭混)
- 33 25Y4/2暗灰黄色砂泥 (炭混)
- 34 25Y4/2暗灰黄色砂泥
- 35 25Y4/2暗灰黄色砂泥 (炭混)
- 36 25Y4/2暗灰黄色砂泥
- 37 25Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
- 38 25Y4/2暗灰黄色砂泥
- 39 25Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 40 25Y4/2暗灰黄色砂泥
- 41 25Y3/2黒褐色砂泥
- 42 25Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 43 25Y4/4オリーブ褐色砂泥 (ベース)

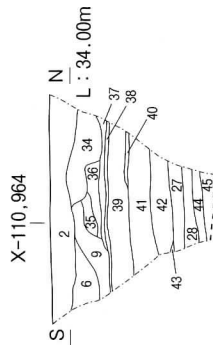
西壁



拡張部南壁



拡張部西壁



- 1 試掘坑
- 2 碎石・盛土及び攪乱
- 3 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (漆喰・煉瓦・焼土混)
- 4 10YR3/3暗褐色砂泥 (焼土混)
- 5 10YR3/2黒褐色砂泥
- 6 10YR3/3暗褐色砂泥 (焼土混)
- 7 10YR3/2黒褐色砂泥
- 8 10YR3/2黒褐色砂泥
- 9 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (小礫混)
- 10 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (炭混)
- 11 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (φ 3~15cm礫多量混)
- 12 25Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 (礫混)
- 13 10YR3/1黒褐色砂泥 (φ 1~8 cm礫多量混)
- 14 10YR3/2黒褐色砂泥 (φ 3~8 cm礫多量混)
- 15 10YR3/2黒褐色砂泥
- 16 10YR3/2黒褐色砂泥 (φ 3~10cm礫混)
- 17 10YR3/2黒褐色砂泥
- 18 25Y3/2黒褐色砂泥 (小礫混)
- 19 25Y3/2黒褐色砂泥
- 20 25Y4/2暗灰黄色砂泥 (炭混)
- 21 25Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 22 25Y4/3オリーブ褐色砂泥 (小礫混)
- 23 25Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 24 25Y3/2黒褐色砂泥 (砂質・小礫混)
- 25 25Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 26 25Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 27 25Y3/2黒褐色砂泥
- 28 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (砂質)
- 29 25Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 30 25Y3/2黒褐色砂泥 (φ 5~20cm礫混)
- 31 25Y3/2黒褐色砂泥
- 32 25Y3/2黒褐色砂泥

- 33 25Y4/3オリーブ褐色砂泥 (溝433)
- 34 10YR4/3におい黄褐色砂泥
- 35 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 36 10YR4/3におい黄褐色砂泥
- 37 10YR4/2灰黄褐色砂泥
- 38 10YR3/3暗褐色砂泥 (小礫混) (路面)
- 39 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (φ 1~10cm礫多量混)
- 40 10YR4/2灰黄褐色砂泥 (路面)
- 41 10YR4/3におい黄褐色砂泥 (φ 1~8 cm礫多量混)
- 42 25Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 (小礫混)
- 43 25Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 (小礫混)
- 44 25Y3/1オリーブ黒色砂泥 (植物遺体含む) } 溝433
- 45 5Y3/1オリーブ黒色砂泥
- 46 25Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 (φ 1~10cm礫混)
- 47 25Y4/3オリーブ褐色砂泥 (φ 1~5 cm礫混)

図7 東・西壁断面実測図 (1/100)

II 遺 構

調査地は敷地全体に碎石、盛土、攪乱があり、東半部においては南東部が大きく攪乱されているものの現地表下から約1mで、西半部では約0.8mで遺構面に達する。

調査区の基本層序は地表下1mまで江戸時代の土層があり、その下に室町時代の整地層①、平安時代後期から鎌倉時代の整地層②があり、以下灰黄褐色砂泥層の基盤層となる。調査区東半部では平安時代の遺構の下層標高約32.8mで少量の土器片を含む弥生時代末から古墳時代初めの遺物を含む堆積層を確認した。以下、主要な遺構について述べる。

弥生時代末期から古墳時代前期

落ち込み578 (図9)

東半部の調査区全体において深さ0.2mの浅い落ち込みを検出した。この落ち込みは自然堆積層とみられ、自然堤防上の低位部に堆積した土層と考えられる。弥生時代末から古墳時代前期の土器片を少量包含する。

平安時代から鎌倉時代

埋納遺構577 (図8・図版5の1)

調査区中央部やや西寄りに位置する小穴である。掘形は0.4mの円形を呈し、深さ0.05mを測る。掘形内にはほぼ完形の土師器杯が正位の状態出土した。杯内には内容物は見られなかったが、胎衣埋納遺構の可能性はある。杯上面は平安時代後期の溝で削平を受けており、当初は杯蓋などを伴っていた可能性が考えられる。9世紀前半。

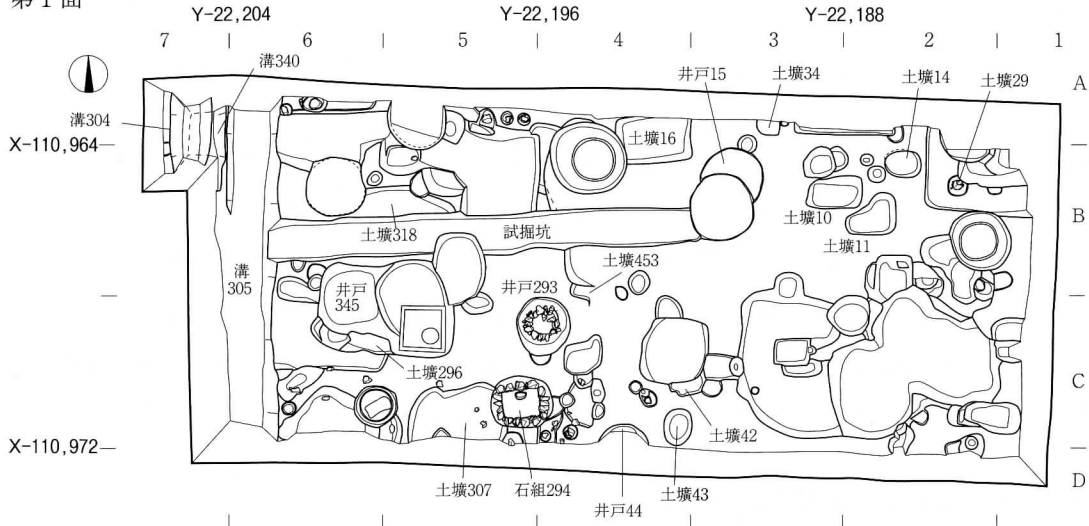
溝200 (図8・10・11・図版2の1・3の1・5の1・6の2・7の1)

調査区北半部に位置する東西方向の溝である。幅2.2~3.0m、深さ0.25~0.5mを測る。調査区西部で町尻小路東側溝である溝433に注ぎ込む手前で一旦浅くなっており、溝幅を狭く造る。これは町尻小路東側溝に注ぎ込む水量の調節をするためのものと考えられる。ここまで2m以上あった溝幅がここでは約0.8~1mに狭められ、南側が古く、北側が後に造り替えられたものである。旧段階では平らな石を立てて水量調整の板などを据えて堰としたとみられる。新規の溝底には幅6×長さ45cmの板を溝に対して直交するように設置した痕跡が認められた。堰板とみられる。溝の埋土は大きく3層に分けられ、上層は炭と焼土が多量に混入する灰黄褐色砂泥層、中層は暗灰黄色砂泥層、下層は暗灰黄色泥土層である。溝内から11世紀後半から12世紀代の土器が多量出土した。

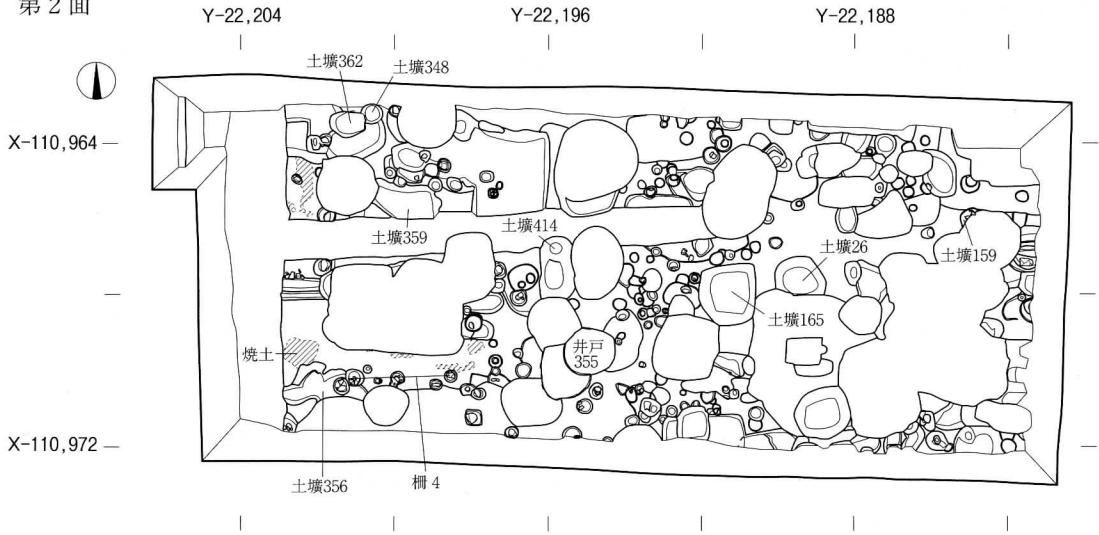
溝433 (図8・13・図版5の1・7の2・8の2)

調査区西端に位置する南北方向の溝である。東肩部のみの検出で西肩部は調査区外となりその規模は不明だが、掘形の形状より幅3mほどの溝と考えられる。町尻小路東側溝にあたり、溝

第1面



第2面



第3面

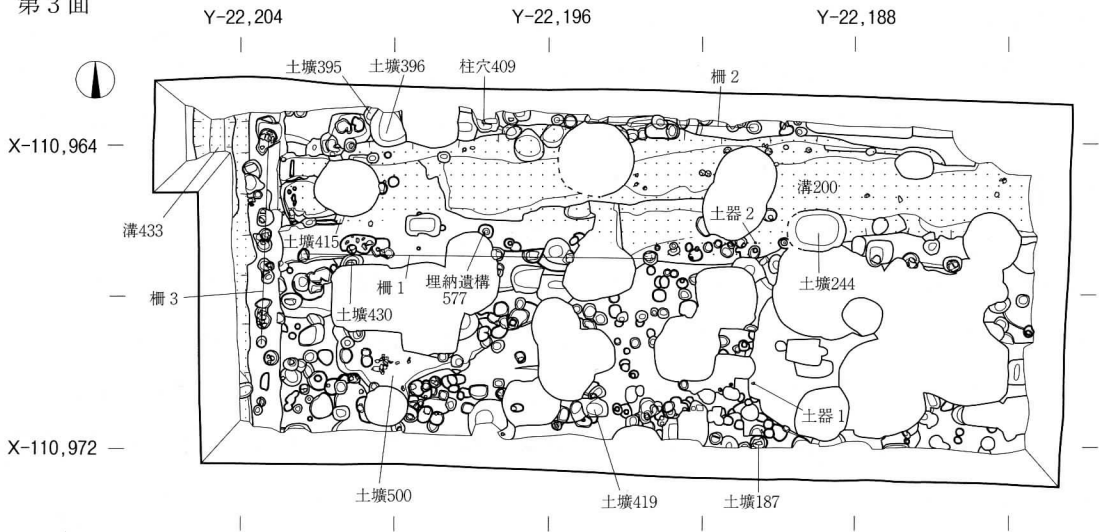


図8 第1～3面遺構実測図 (1/200)

200と同時期の土器類が出土している。

土壙500 (図8・図版5の1・8の1)

調査区南西部に位置する焼瓦溜土壙である。土壙の北半分は後世の攪乱により削平されており、東西長4.0m、南北長2.0m以上、深さ0.25mの規模をもつ。掘形内から出土した多量の瓦はいずれも二次焼成を受けており、建物焼亡に伴い廃棄されたものと考えられる。11世紀後半から12世紀初めの土器が共伴している。

柵1 (図8・12・図版2の1・5の1・6の2)

調査区西半に位置する東西方向の柵列である。溝200の南側に沿うように位置する。東西長9mにわたって検出した。柱間は2.1~2.2mを測り、柱穴は掘形0.25~0.4mの円形、深さ0.15~0.2mを測る。いずれも柱底に根石をもつ。11世紀後半の土器が出土する。

柵2 (図8・12・図版2の1)

調査区北壁沿いに位置する東西方向の柵列である。溝200の北側に沿うように位置する。東西長5mにわたって検出した。柱間は2.5~2.6mを測り、柱穴は掘形0.3~0.4mの円形、深さ0.2~0.3mを測る。11世紀後半の土器が出土する。

柵3 (図8・12・図版5の1・7の2)

調査区西端に位置する南北方向の柵列である。溝433の東肩に沿って、南北長5.8m以上にわたって検出した。柱間は1.7~2.0mを測り、柱穴は掘形0.3~0.5m、深さ0.2~0.4mを測る。町尻小路東築地塀と考えられる。

溝340 (図8・図版4の1)

調査区北西角のトレンチ拡張部分に位置する南北方向の溝である。東肩部のみの検出でその規模は不明だが、溝433の上層埋土の一部か、町尻小路東側溝の後世の造り替えと考えられる。12世紀後半の土器が出土している。

土壙348 (図8・図版4の2)

調査区北西部に位置する土壙である。掘形は0.5mの円形を呈し、深さ0.2mを測る。土器類とともに複数枚の銭貨と刀子が1点出土した。

土壙396 (図8・図版5の1)

調査区北西部に位置する土壙である。北辺は調査区外、東辺は削平を受けておりその規模は径0.9m以上、深さは0.35mを測る。埋土は黒褐色砂泥層で、6枚重なった状態の銭貨が出土した。六道銭とみられる。

土壙187 (図8・図版2の1)

調査区南東部に位置する土壙である。南辺は調査区外だが、掘形は東西幅0.55mの円形を呈し、深さ0.1mを測る。甕を据えた状態で検出した。

柵4 (図8・12・図版4の2)

調査区南西部に位置する東西方向の柵列である。

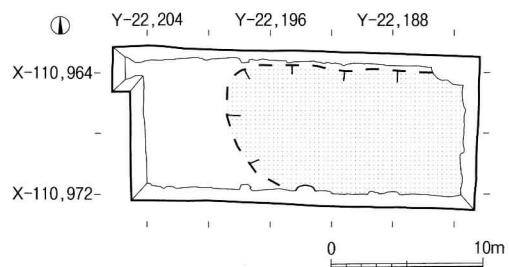
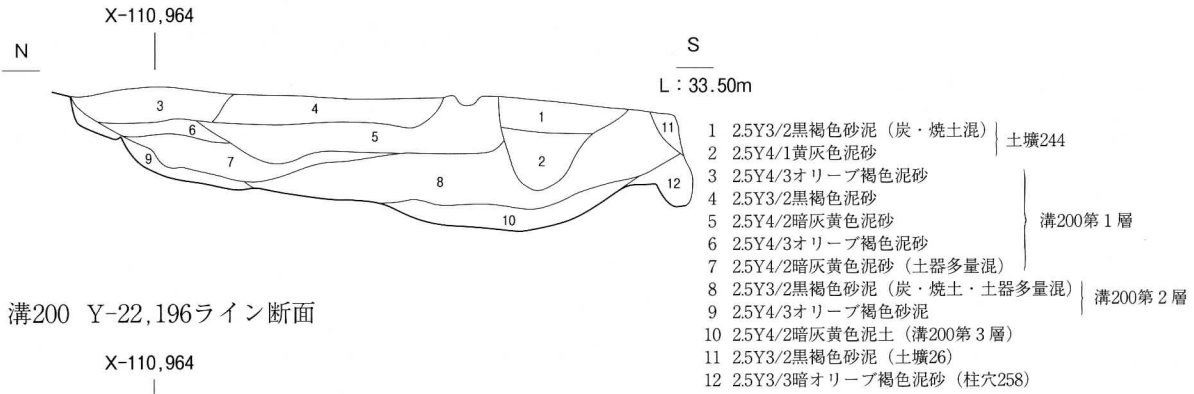
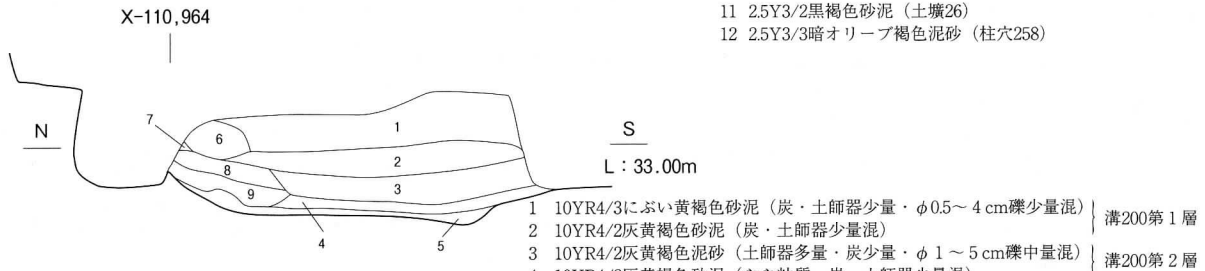


図9 落ち込み578範囲図 (1/500)

溝200 Y-22,189.701ライン断面



溝200 Y-22,196ライン断面



溝200 Y-22,202.76ライン平面・断面

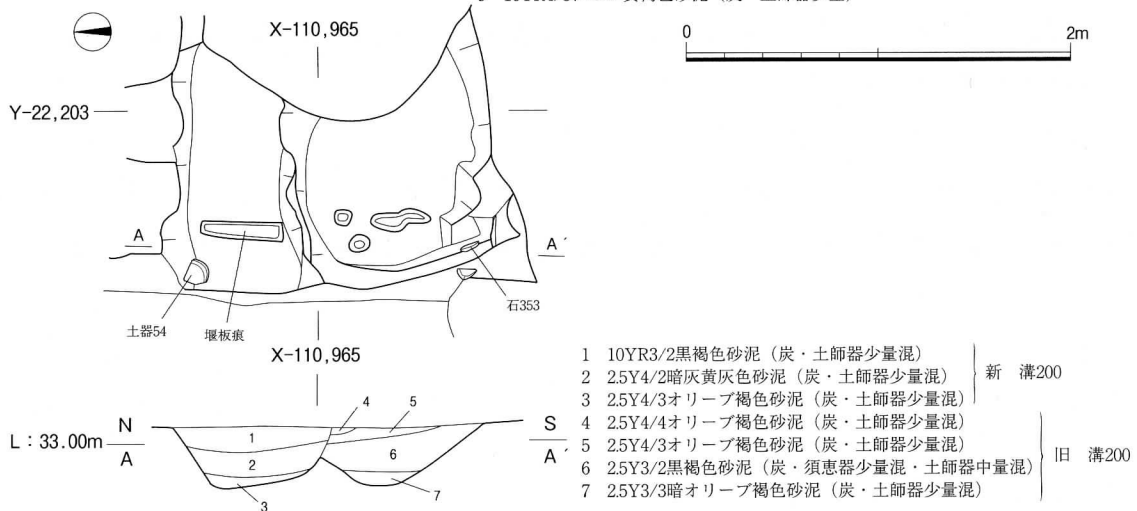


図10 溝200断面実測図 (1/40)

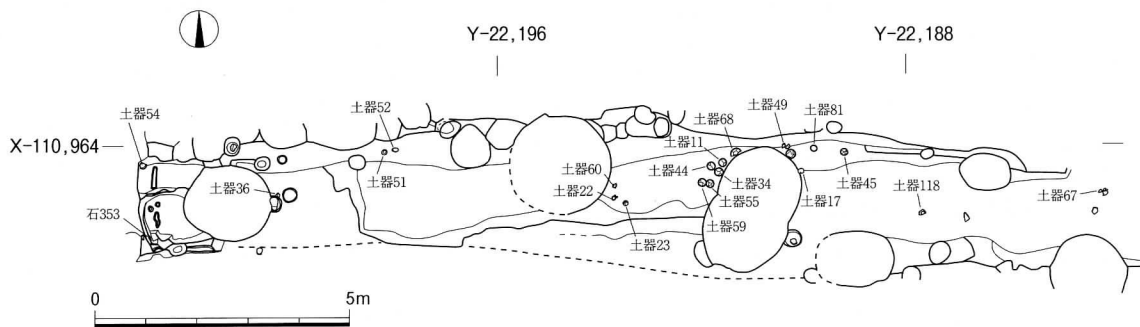


図11 溝200遺物出土状況実測図 (1/150)

東西長3.0mにわたって検出した。柱間は1.2mと1.4m、柱穴は掘形0.35～0.5mの円形を呈し、深さ0.2～0.25mを測る。鎌倉時代前期。

室町時代

溝305・304（図8・図版4の1・6の1）

溝305は調査区西部に位置する南北方向の溝である。西肩部で町尻小路の路面跡と考えられる小石を堅く敷きつめた層を数面確認した。掘形は逆台形状を呈し、幅3m、深さ1.1mを測る。堆積土から16世紀後半代の土器類が出土している。溝304は溝305の造り替えと考える。

井戸345（図8・図版5の1）

調査区西部に位置する井戸である。南北長1.6m、東西長1.5m以上の方形とみられる。深さは1.8mで石組等の痕跡は確認できなかった。溝305と同時期か1段階古い土器類が出土しており、新善光寺の時代の井戸と考える。

土壇244（図8・図版2の1）

調査区北東部に位置する土壇である。南北長1.1m、東西長1.5m、深さ1.0mを測り、楕円形を呈する。埋土は炭・焼土混りの黒褐色泥砂層と黄灰色泥砂層である。室町時代後半。

土壇165（図8・図版1の2）

調査区中央部やや東寄りに位置する土壇である。南北長1.6m、東西長1.5m、深さ0.8mを測り、方形を呈する。埋土は暗灰黄色砂泥層で、北壁が内弯する。

土壇34（図8・14・図版1の1・2の2）

調査区北東部北壁沿いに位置する土壇である。北辺は調査区外のためその規模は不明だが、東西長0.6m、深さ0.1mを測る。土師器皿の多くが2枚重ねの正位の状態で出土しており、室町前期に属すると考えられる。

土壇29（図8・図版1の1）

調査区北東部に位置する土壇である。一部削平を受けるものの、深さ0.1mを測り、掘形は0.5mの円形を呈する。埋土は上層が暗オリーブ褐色砂泥層、下層は黒褐色砂泥層である。甕を据えた状態で検出した。

土壇159（図8・図版1の2）

調査区北東部に位置する土壇である。削平によりその規模は不明だが、深さ0.1mを測り、掘形は円形を呈する。埋土は黒褐色砂泥層で、検出状況から土壇29と同様甕を据えていたと考えられる。

江戸時代以降

土壇11（図8・図版1の1）

調査区北東部に位置する土壇である。南北最大長1.1m、東西長1.3m、深さ0.4mを測り、形状は不定形である。埋土は黒褐色砂泥層で漆喰が混入する。

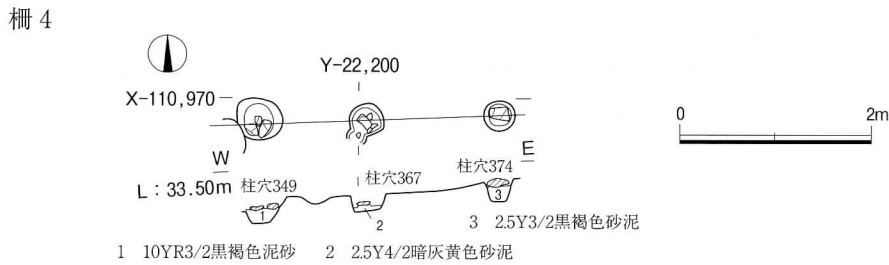
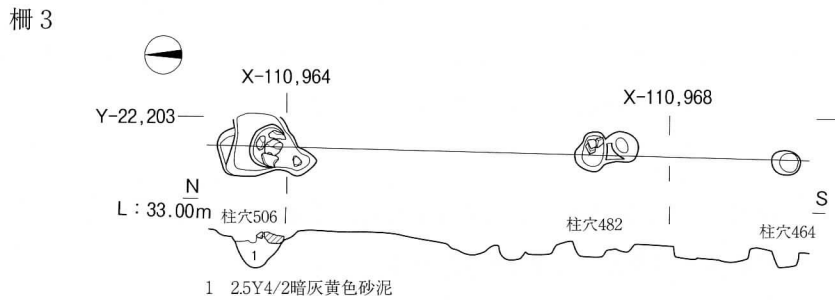
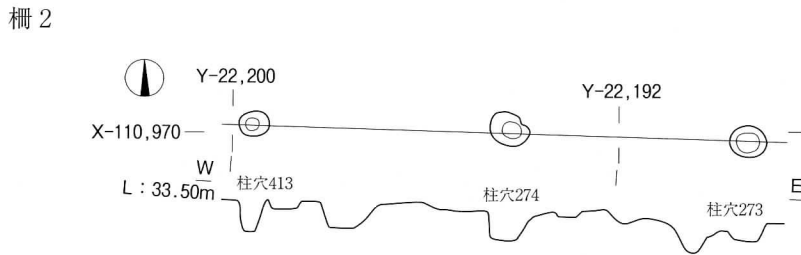
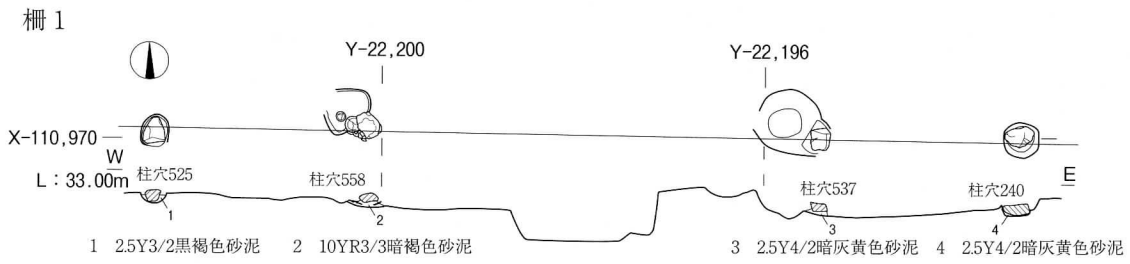


図12 柵 1 ~ 4 実測図 (1/80)

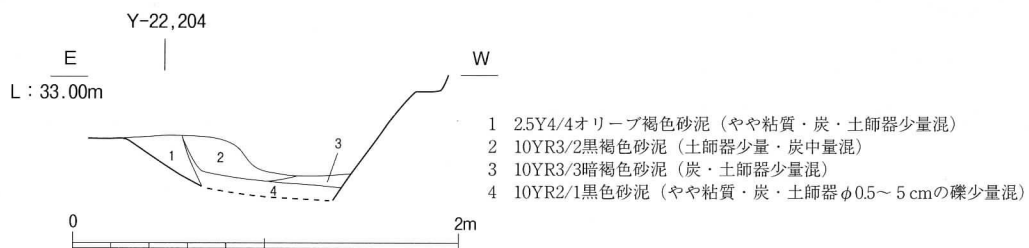


図13 溝433 X-110,964ライン断面実測図 (1/40)

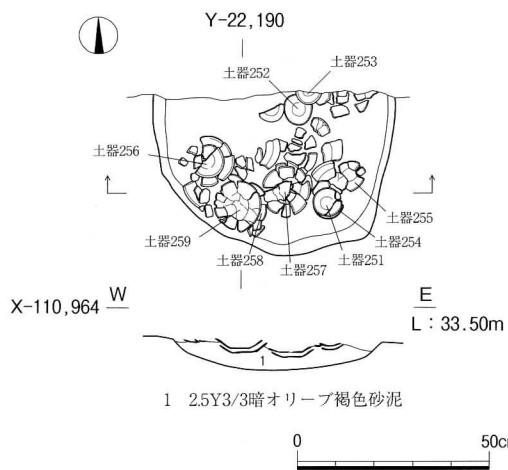


図14 土壙34遺物出土状況実測図 (1/20)

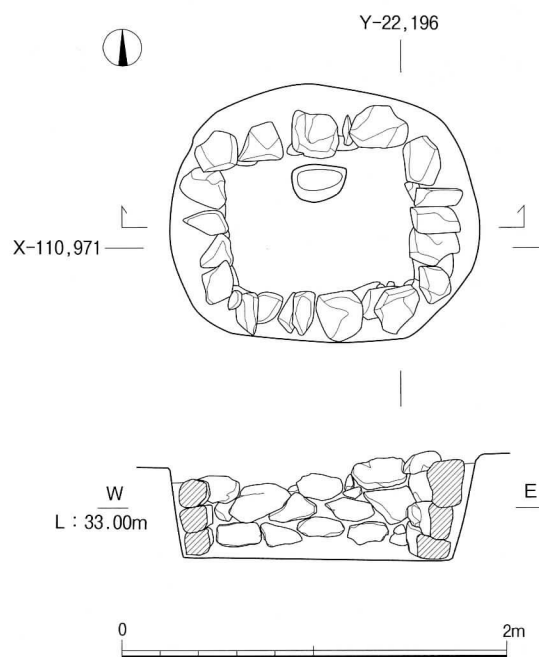


図15 石組294実測図 (1/40)

石組294 (図8・15・図版4の1・5の2)

調査区中央部やや南西寄りに位置する石組の遺構である。掘形の南北長は1.4m、東西長は1.6m、深さ0.65mを測り楕円形を呈する。石組は内径南北0.7m、東西0.9mの長方形で、残存する石組は3段である。石組内底部に南北0.3m、東西0.2m、深さ0.1mの凹みを検出した。銅製品や砥石が出土している。江戸時代中期から後期。

土壙10 (図8・図版1の1)

調査区北東部に位置する土壙である。南北長0.8m、東西長1.4m、深さ0.65mを測り、長方形を呈する。埋土は黒褐色砂泥層である。

土壙14 (図8・図版1の1)

調査区北東部に位置する土壙である。南北長0.7m、東西長1.0m、深さ1.0mを測り、楕円形を呈する。掘形は袋状を呈し、貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色砂泥層である。江戸時代中期。

井戸293 (図8・図版4の1)

調査区中央部に位置する。径1.5mの円形の掘形を呈する石組井戸である。石組の内径は0.5mで石組が一部崩れている。銭貨が出土している。江戸時代前期。

井戸15 (図8・図版1の1)

調査区中央部やや北東寄りに位置する。径1.6mの円形の掘形を呈する井戸である。江戸時代末期。

Ⅲ 遺物

出土した遺物は整理箱に130箱ある。時代は弥生時代末期から近代までのものがある。遺物の種類には土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、土製品、瓦類、石製品、金属製品、銭貨などがある。以下主要な遺物について概述する。

なお、時代区分は平安京の土器編年をもとにおこなう。

土器・陶磁器類

落ち込み578出土土器 (図16・図版9)

土師器高杯(1)、土師器壺(2)がある。1は高杯脚柱部で、調査区中央部やや南東よりの第1層から出土した。白色砂粒を多く含む。2は平底の小壺で、溝200東半部下層のオリブ褐色泥砂層から出土した。弥生時代末から古墳時代初頭頃のものである。

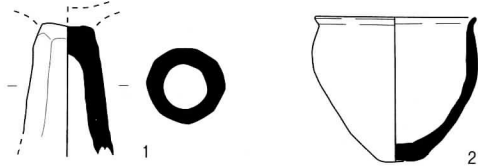
埋納遺構577出土土器 (図16・図版9)

土師器杯(3)がある。口径16.5cm、器高3.45cmを測る。ほぼ完形品。口縁端部が内側にわずかに肥厚し、外面はヘラ削りをおこなう。9世紀初頭の特徴を有する。

溝200出土土器 (図17・18・19・図版9・10)

土師器(4~76)、白色土器(77、78)、黒色土器(79)、緑釉陶器(80)、灰釉系須恵器(81~83)、灰釉陶器(84~86)、瓦器(87~93)、青白磁(94)、青磁(95)、白磁(96~123)などがある。土師器には皿Ac(5~8)、皿A(9~26)、皿N(27~70)、台付皿(71)、羽釜(72)、高杯(73~76)がある。4・77・78はロクロ成形の皿で、77・78は底部に糸切り痕が残る。黒色土器(79)は小皿でBタイプである。緑釉陶器(80)は底部のみで糸切り痕が残る、高台の内側に段をもつ。底部内面はトチン痕が認められる。釉は濃緑色を呈し、胎土は硬質。灰釉系須恵器(81)は輪花椀である。82は底部内面が極めて平滑である。83は底部に糸切り痕が残る。灰釉陶器(84)は精良な淡灰色の素地をもち、体部内面に厚く釉が認められる。85の胎土はやや粗い。86は底部に糸切り痕が残る。瓦器には小皿(87、88)、椀(89~92)、鉢(93)がある。89・90・92は内面を密に磨く。93は口径43.4cm、内外面ともに密に磨きを施す。青磁には青白磁合子(94)、碗底部(95)がある。94の底部外面には型押し「李家合子」の文字が認められる。白磁には合子(96)、碗(97~108)、碗底部(109~122)、壺(123)がある。97~99は高台はなく、底部外面はヘラ削り痕がみられる。

落ち込み578



埋納遺構577

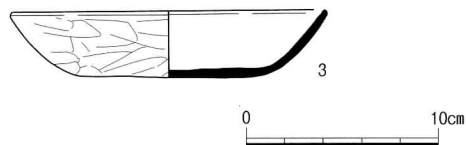


図16 落ち込み578・埋納遺構577
出土遺物実測図(1/4)

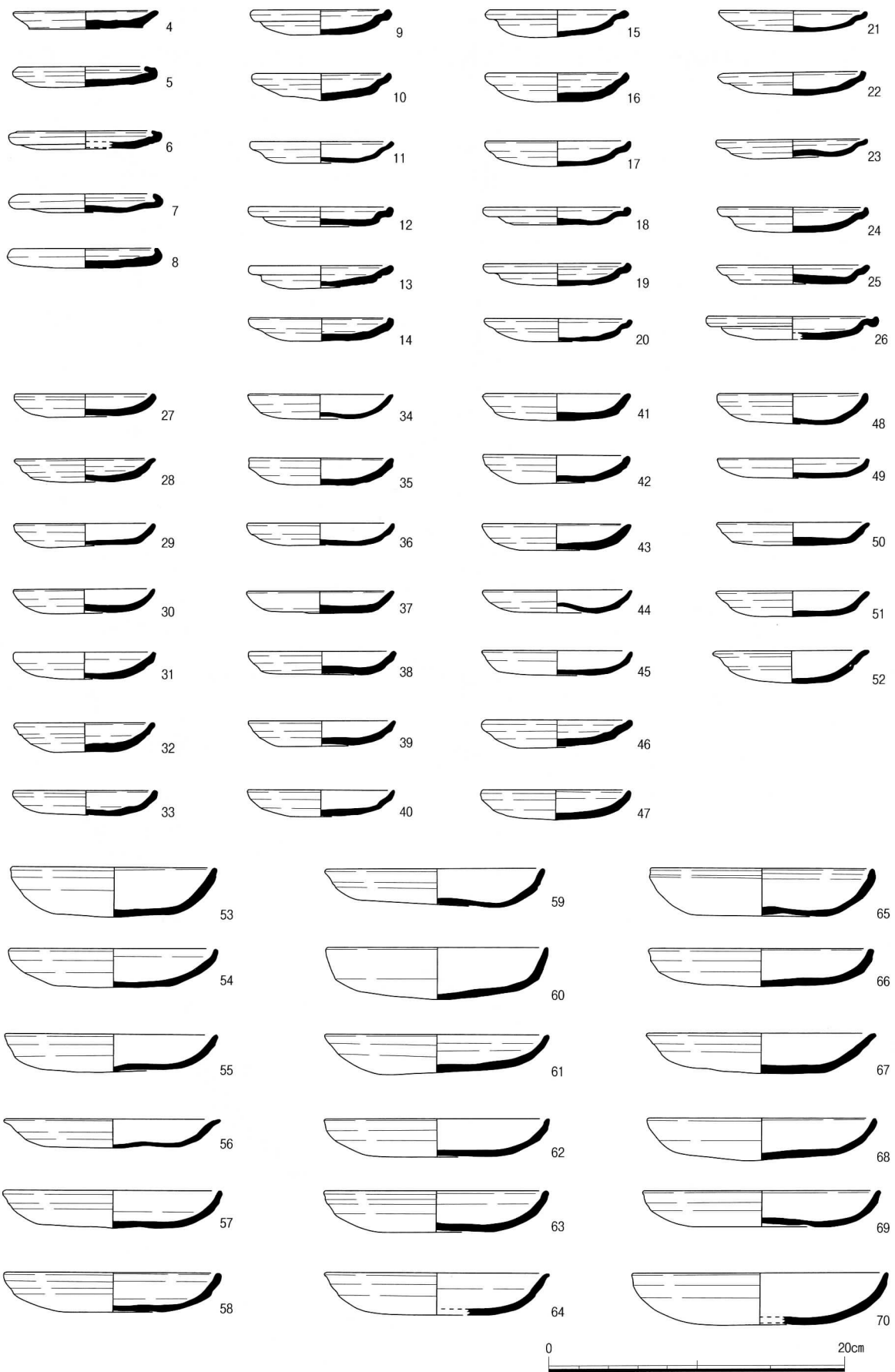


图17 溝200出土遺物実測図(1)(1/4)

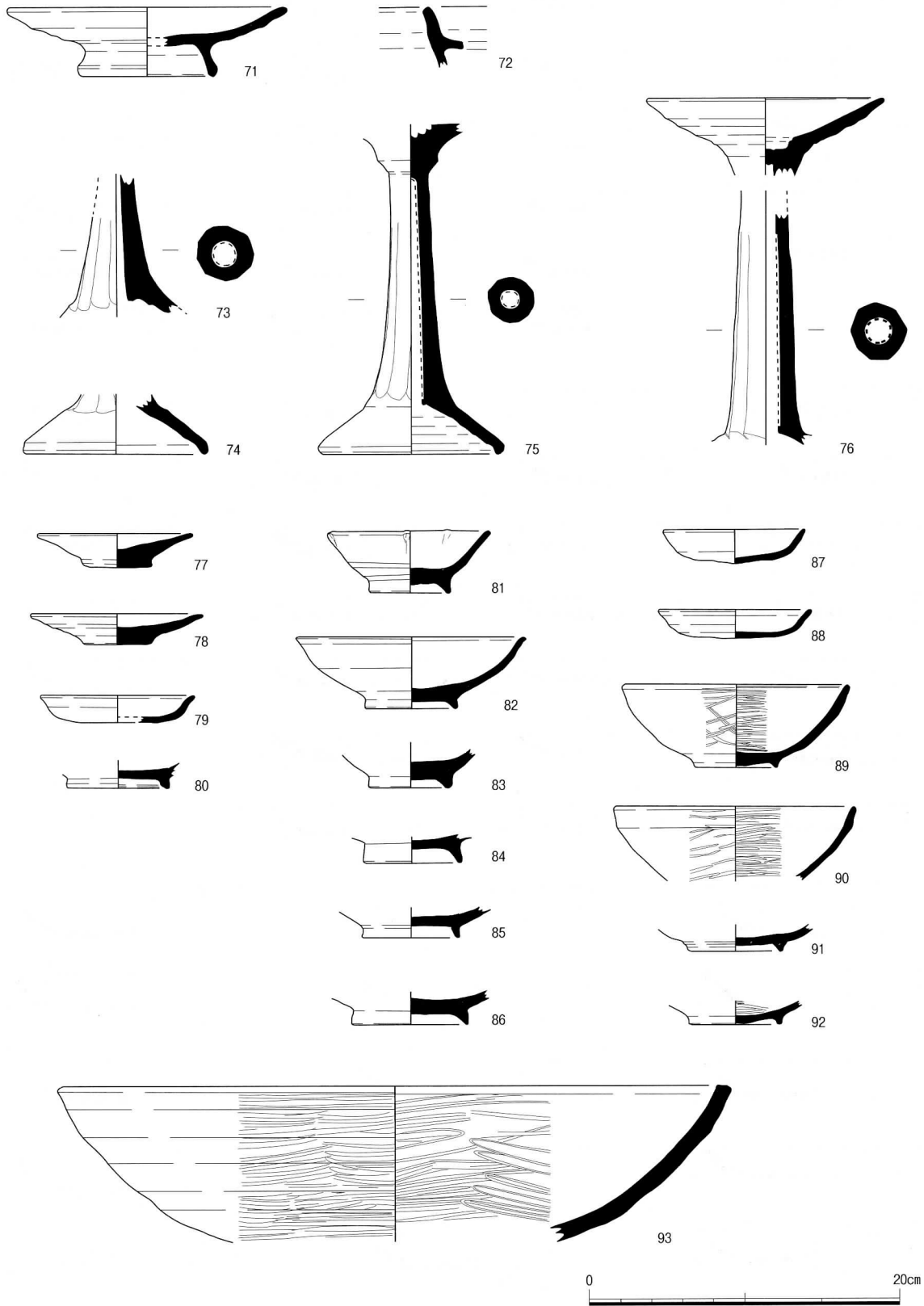


图18 溝200出土遺物実測図(2)(1/4)

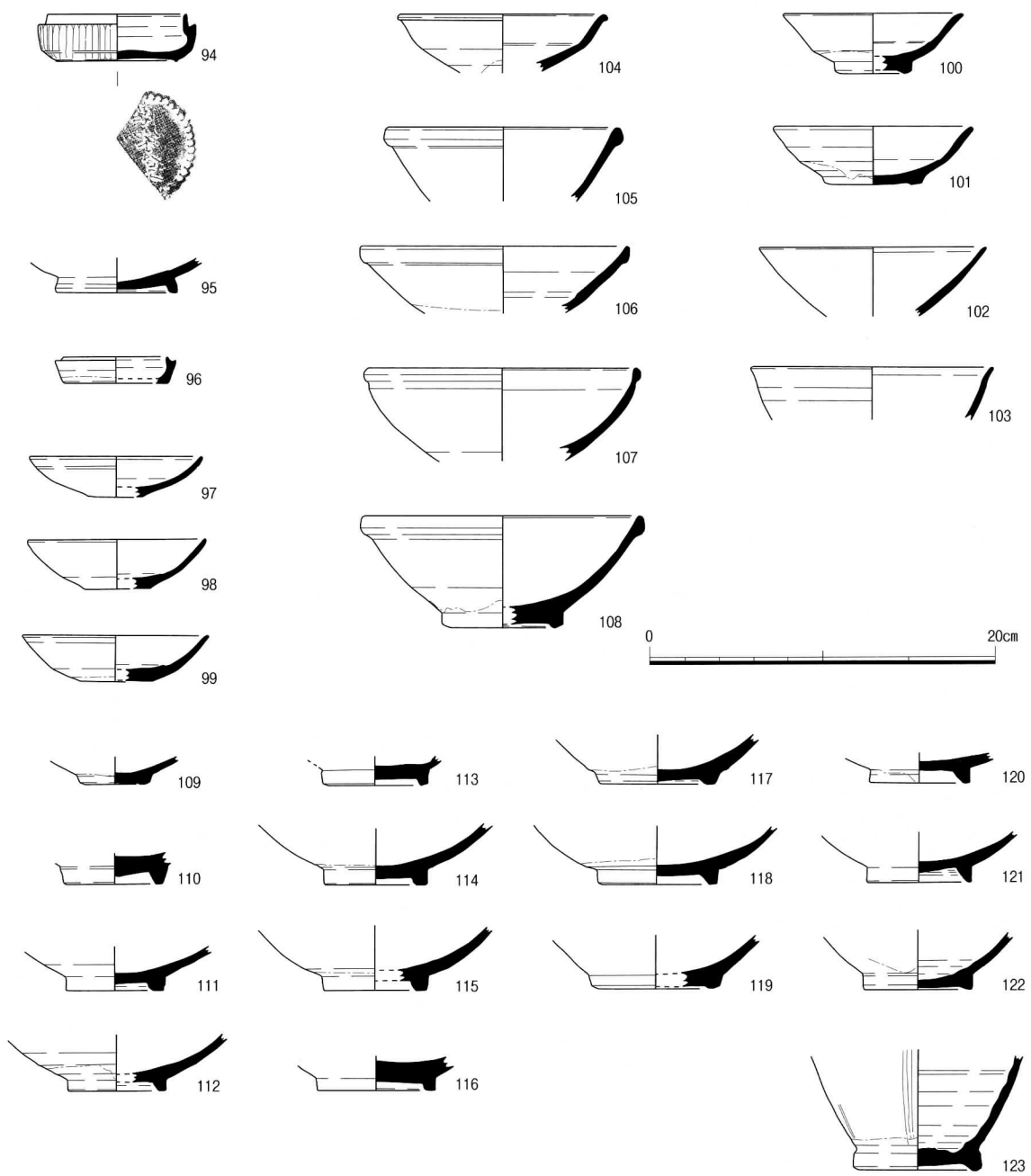


图19 沟200出土遗物实测图(3)(1/4)

100・101の底部内面には一条の沈線が認められる。104～108は口縁端部が肥厚する玉縁状を呈する。109～122は削り出し高台で、断面が方形のものと三角形のものがある。123の体部外面には1本もしくは2本を一単位とする凸線が4カ所確認できる。IV～V期の11世紀後半から12世紀代に属する。

溝433出土土器 (図20)

土師器 (124～149)、黒色土器 (150～153)、瓦器 (154～156)、灰釉陶器 (157～159) などがある。土師器には皿A (124～132)、皿N (133～149) がある。134の内面、135の内外面、143の口縁部内面に煤が付着する。黒色土器には皿 (150)、椀B (151～153) がある。151・152は口縁端部内面に沈線があり、内外面ともに密に磨きを施す。150・152はBタイプ、151・153はAタイプである。瓦器には小皿 (154、155)、椀 (156) がある。155は内外面ともに密に磨きを施す。灰釉陶器は底部 (157～159) がある。158は内面に施釉する。11世紀後半から12世紀前半に属する。

土壇500出土土器 (図21)

土師器 (160～168、175)、白色土器 (169)、瓦器椀 (170)、灰釉陶器底部 (171)、緑釉陶器 (172・173)、白磁碗 (174) などがある。土師器は皿N (160～162、167、168)、皿A (163～166)、甕口縁 (175) がある。167は口縁部を二段にナデ、口縁端部は外反する。175は受口状口縁をもつ土師器甕で弥生時代末から古墳時代初頭のもので混入品である。白色土器底部 (169) は、糸切り痕が確認できる。瓦器椀 (170) は口縁端部内面に沈線が巡る。内外面ともに密に磨きを施す。緑釉陶器は底部のみで、172は底部内面に沈線が確認できる。近江産。173は蛇の目の削り出し高台である。11世紀後半から12世紀前半に属する。

柵1・3出土土器 (図21)

柵1の土師器皿A (176～178) は柱穴558出土である。柵3の土師器は皿A (179～181)、皿N (182～185) がある。179・184は柱穴506出土、180～182・185は柱穴482出土、183は柱穴464出土である。皿Nは口縁部を二段にナデ、口縁端部が外反する。IV期新の11世紀後半代のものである。

溝340出土土器 (図21)

土師器皿N (186～189) がある。12世紀後半。

土壇348出土土器 (図21)

土師器皿N (190～197)、瓦器椀 (198) がある。192・196・197は口縁端部の断面が三角形を呈する。198は口縁端部内面に沈線が確認できる。内外面ともに密に磨きを施す。VI期中。

柱穴409出土土器 (図21・図版10)

土師器皿N (199、200)、瓦器 (201、202) がある。201は炭素の吸着がとんでいる。内面に磨きを施す。202は口縁端部内面に沈線が巡る。内面の磨きは細密だが、外面は粗く縦方向に施す。平安時代末期から鎌倉時代。

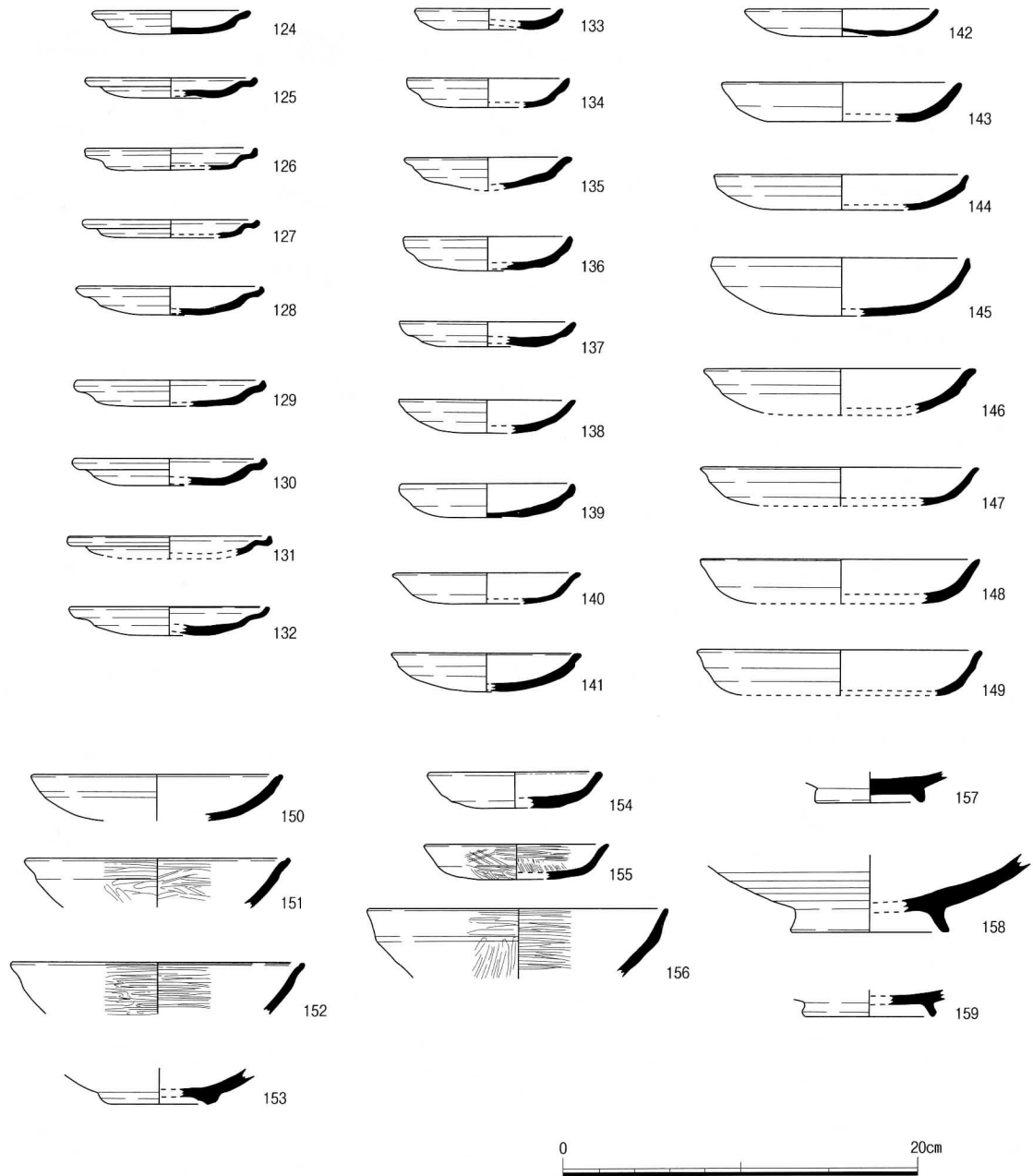


図20 溝433出土遺物実測図 (1/4)

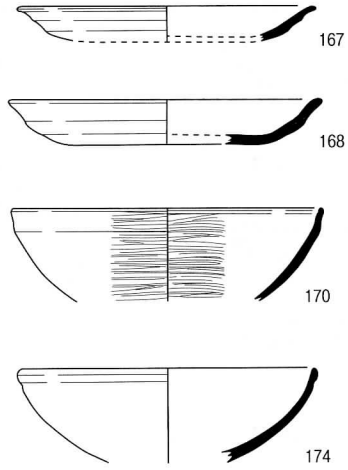
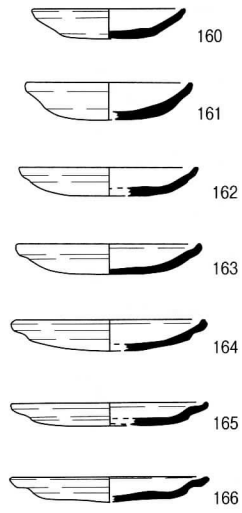
土壙396出土土器 (図22・図版10)

土師器皿N (203~214)、瓦器 (215~217)、白磁 (218、219) がある。205は口縁端部内外面に煤が付着する。瓦器は皿 (215、216)、鍋 (217) がある。215は内外面に磨きを施す。217は体部内面にハケに似たナデ、外面は指押さえのみである。胎土は長石粒を含み、耐火土である。白磁は碗 (218)、碗底部 (219) で、218は内面に沈線が一条確認できる。VI期新。

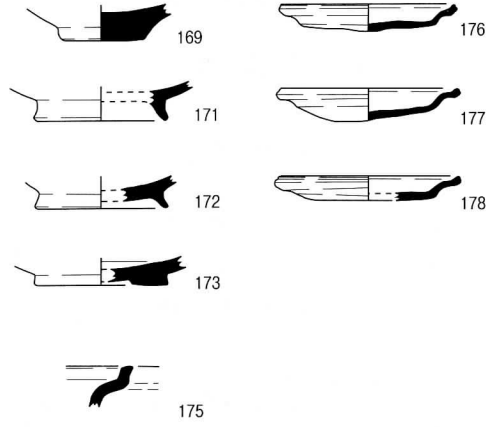
土壙359・362・187出土土器 (図22)

土壙359の青白磁合子蓋 (220)、土壙362の青磁合子蓋 (221) はともに口縁部内面は釉をかきとる。222は土壙187出土の焼締陶器の甕底部である。いずれも鎌倉時代に属すると考えられる。

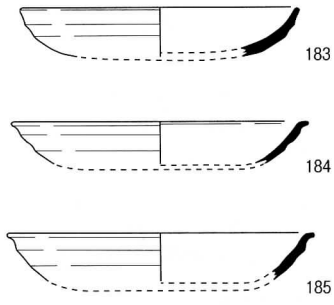
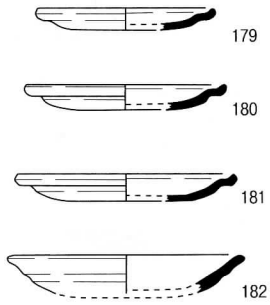
土壙500



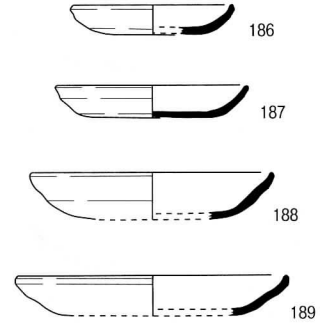
柵 1



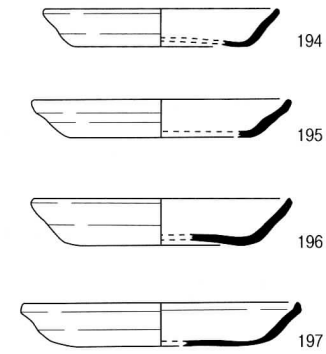
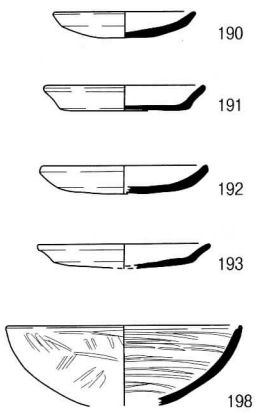
柵 3



溝340



土壙348



柱穴409

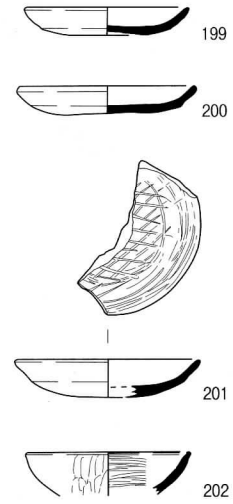
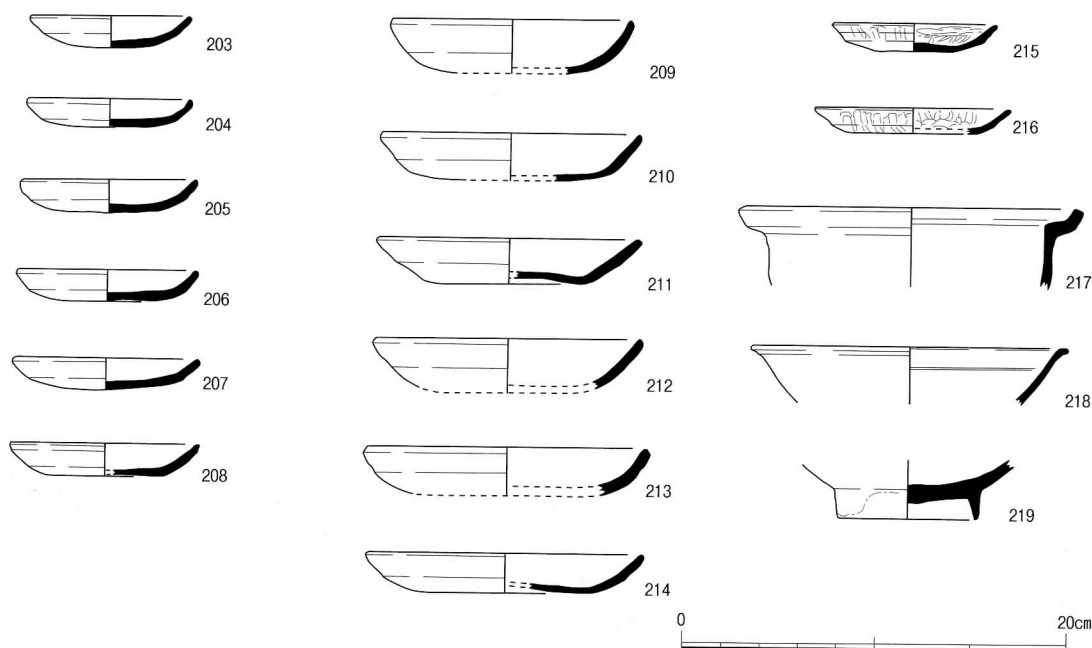
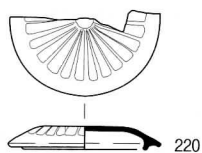


图21 土壙500·柵 1·3·溝340·土壙348·柱穴409出土遺物実測図 (1/4)

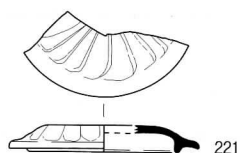
土壙396



土壙359



土壙362



土壙187



図22 土壙396・359・362・187出土遺物実測図(1/4)

溝305出土土器 (図23)

土師器 (223~232)、焼締陶器 (233)、青磁 (234~236)、白磁 (237、238) がある。土師器は皿N (226)、皿S (223~225、227~232) がある。233は備前系の播鉢である。青磁は碗 (234、235)、碗底部 (236) がある。234は内面に劃花文を施す。235は内面に劃花文、口縁部外面に雷文を施す。白磁碗 (237) は外面に沈線が一条確認でき、底部内面には劃花文を施す。238は壺底部である。X期古~中。

溝304出土土器 (図23)

土師器皿S b (239)、皿S (240、241) がある。X期中~新。

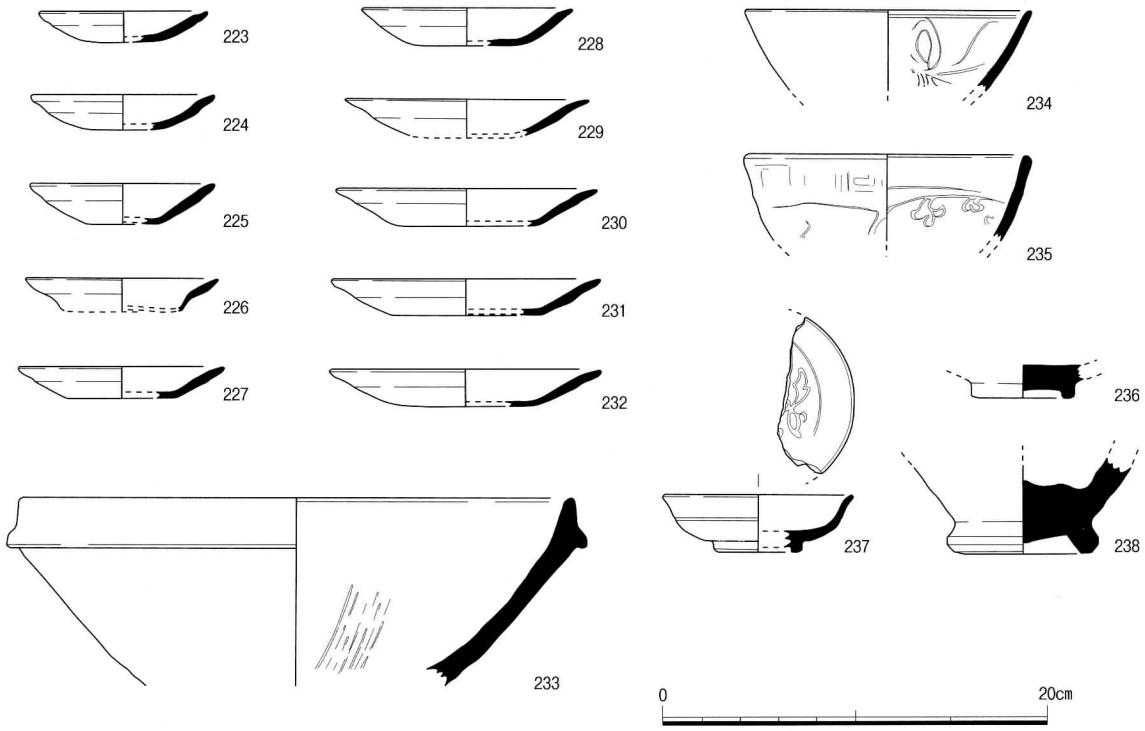
井戸345出土土器 (図23)

土師器 (242~245)、瓦器火舎 (246、247)、施釉陶器碗 (248、249)、青磁碗 (250) がある。土師器は皿N (242、243)、皿S (244、245) がある。248・249は灰釉を施す。250は口縁部内外面に施釉する。IX期新~X期古。

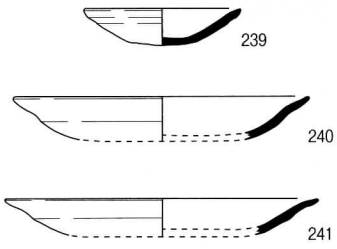
土壙34出土土器 (図24・図版11)

土師器皿N (251~258)、皿S (259) がある。皿Nは大小がある。大は口径11.8~12.6cm、器高2.3~2.7cm、小は口径7.4~8.5cm、器高1.6~1.8cmを測る。VIII古。

溝305



溝304



井戸345

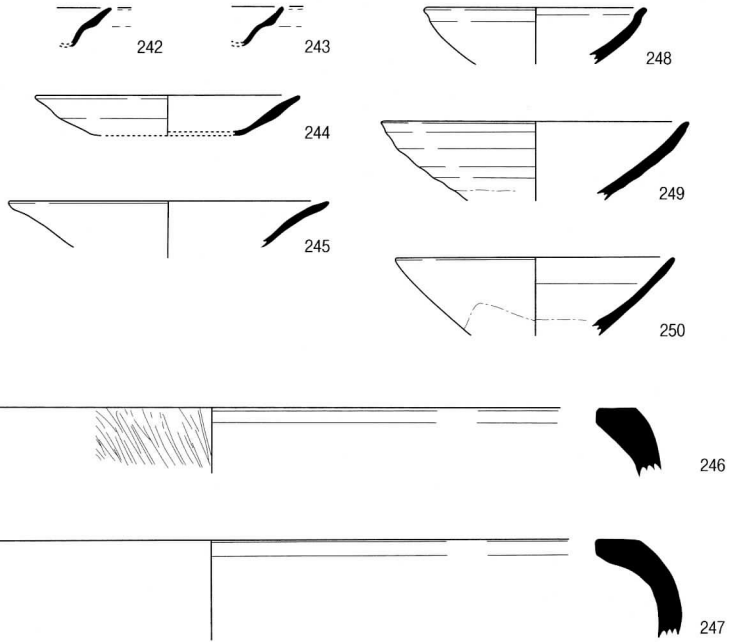


図23 溝305・304・井戸345出土遺物実測図 (1/4)

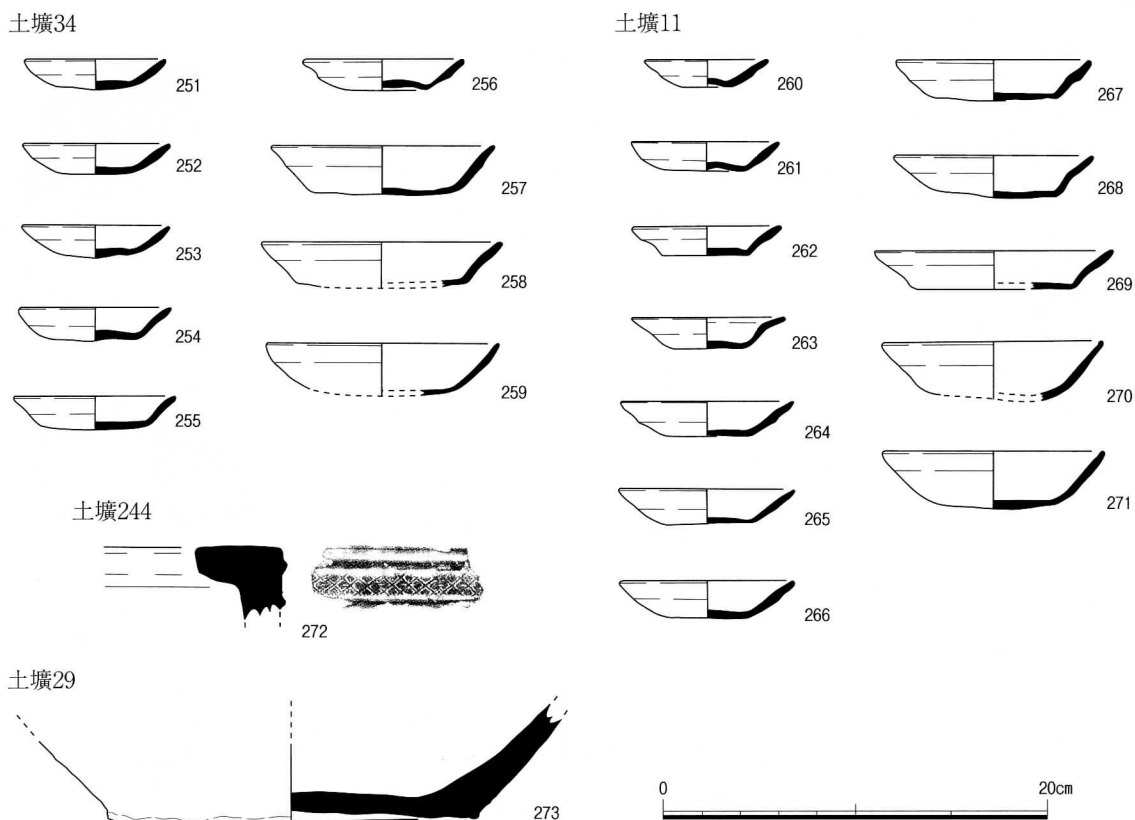


図24 土壌34・11・244・29出土遺物実測図(1/4)

土壌11出土土器 (図24・図版11)

土師器皿 N (260~269)、皿 S (270、271) がある。皿 N は大小がある。大は口径9.0~12.4cm、器高1.8~2.2cm、小は口径6.4~8.0cm、器高1.5~1.7cmを測る。264~266は口縁部内外面に炭化物が付着しており、灯明皿と考えられる。Ⅷ期中。

土壌244出土土器 (図24)

土師器火舎 (272) がある。口縁はほぼ直角に内傾し、平坦部をもつ。口縁外面に二条の突線があり、中に斜格子文を刻印する。

土壌29出土土器 (図24)

焼締陶器の甕底部 (273) がある。底径19.4cmを測る。

石組294出土土器 (図25)

土師器皿 N r (274)、皿 S (275)、染付磁器碗 (276) がある。275は口縁部内外面に炭化物が付着する。江戸中期。

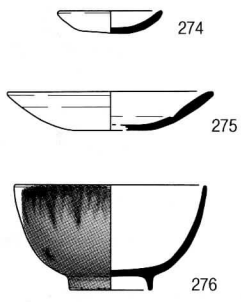
土壌26出土土器 (図25・図版11)

土師器皿 N r (277~284)、皿 S b (285、286)、皿 S (287~290)、瀬戸美濃系陶器皿 (291)、志野向付 (292) がある。288は口縁部内外面に煤が付着する。桃山から江戸初期。Ⅺ期古。

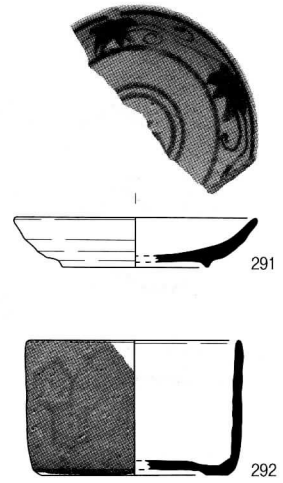
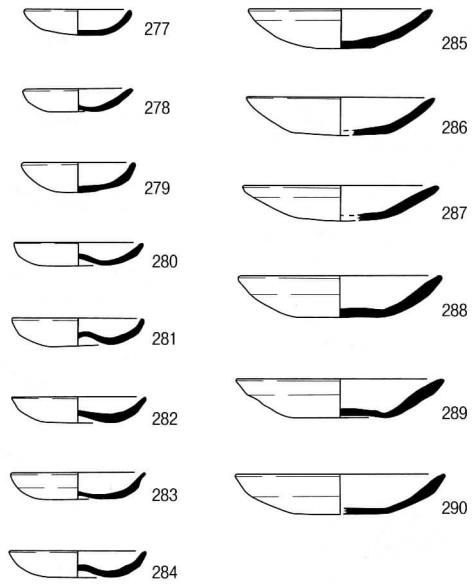
土壌10出土土器 (図25・図版11・12)

土師器 (293~313)、瓦器瓦灯 (314)、染付磁器小椀 (315)、鉄釉小椀 (316)、青磁碗 (317、

石組294



土壙26



土壙10

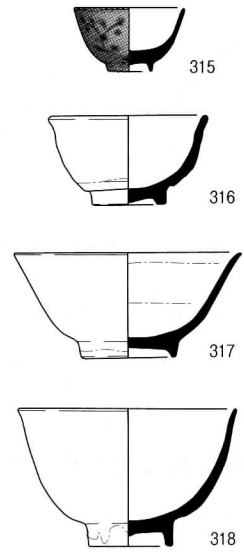
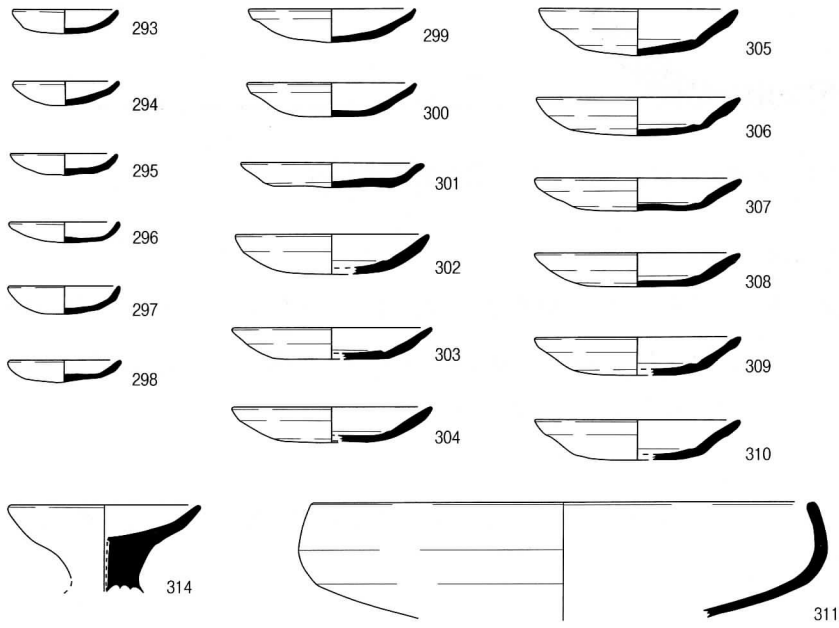
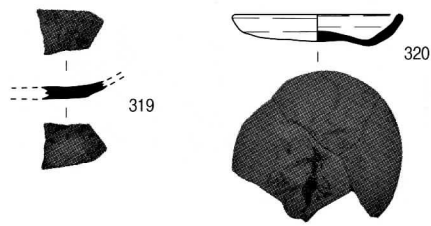


图25 石組294・土壙26・10出土遺物実測図 (1/4)

溝200第1層

土壙307



溝200北肩



図26 墨書土器実測図 (1/4)

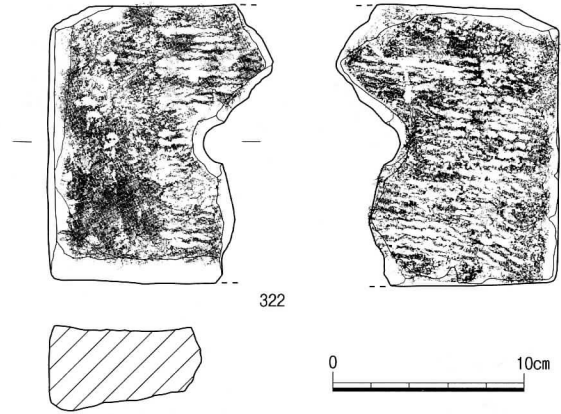


図27 有孔磚拓影・実測図 (1/4)

318)がある。土師器は皿N r (293~298)、皿S b (299、300)、皿S (301~310)、鉢 (311)、焙烙鍋 (312、313)がある。309は灯明皿である。311は底部外面をヘラ削りする。311~313は外面に煤が付着する。314は燈火皿の受け部分である。317は体部内面に鉄釉をハケ塗りし、その後口縁部内面から外面に青磁釉を施す。Ⅱ期新。

墨書土器 (図26・図版12)

319は土師器杯底部である。溝200第1層から出土した。内外面に墨書が認められるが、字か模様か判読できない。320は土師器皿N rである。土壙307から出土した。底部外面に墨書が認められるが詳細不明。321は白色土器高杯杯部である。溝200北肩から出土した。杯部外面に点線のような墨書が認められる。

土製品 (図27)

有孔磚 (322)

溝305東肩第4層から出土した。各面全てに縄目叩き痕が残る。胎土には白色砂粒が多く含まれ、焼きはしっかりしている。

瓦類 (図28・図版12~14)

複弁五葉蓮華文軒丸瓦 (323)

柱穴336出土。外区に11個の珠文を配し、中房に1+4の蓮子を配する。胎土に砂粒を含み、焼きはやや甘く黒灰色を呈する。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦 (324・327・329・330・331)

324は溝200第2層出土。范押しが浅く、中房の蓮子数は不明。胎土は砂粒を含み、焼きは甘く灰白色を呈する。327・329・330は溝200第1層出土。327は周縁部がやや高く、立ち上がり部に珠文を配する。蓮子は1+5。胎土は砂粒を含む。二次焼成により一部にぶい黄橙色を呈する。

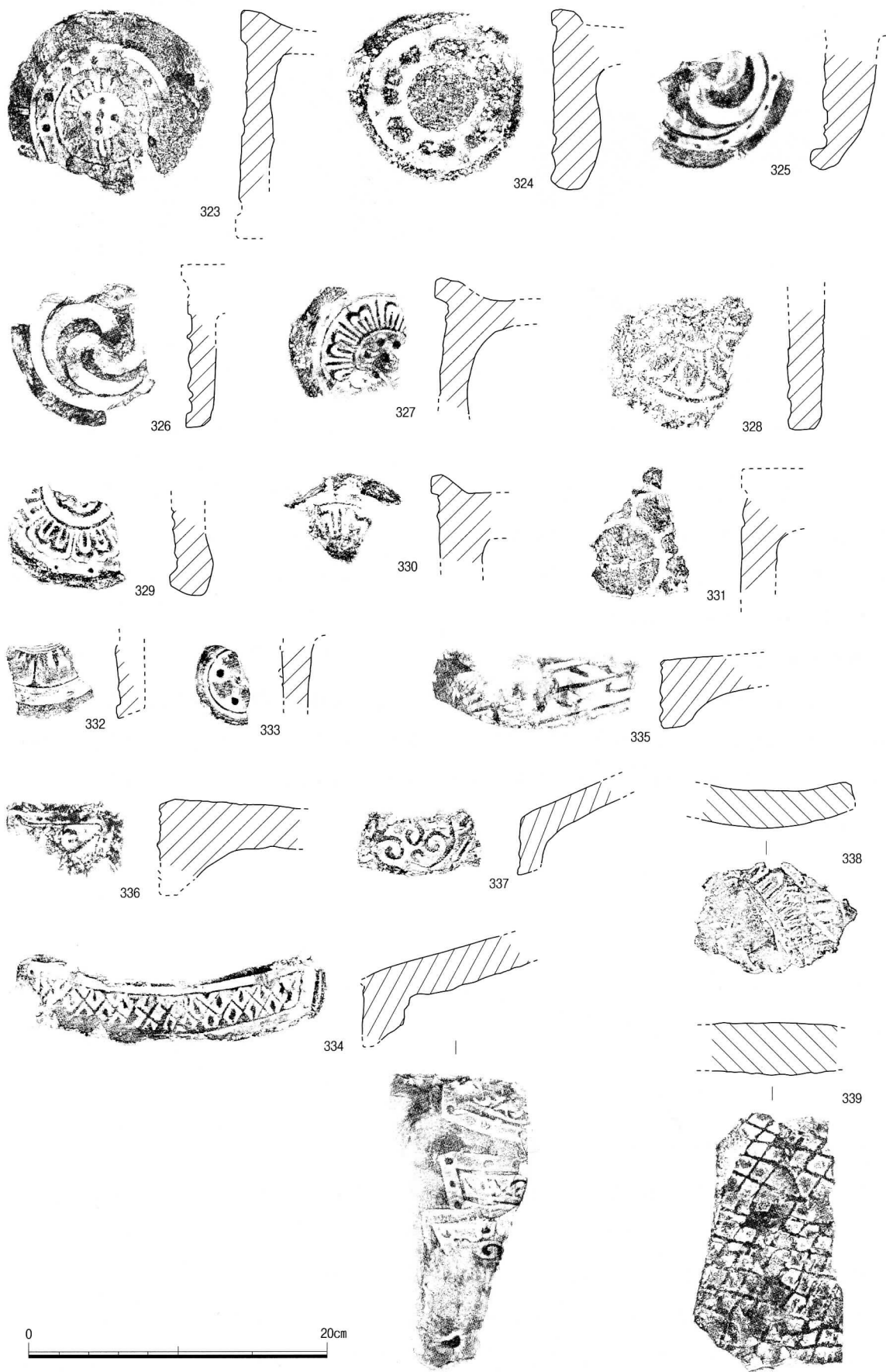


图28 軒瓦·平瓦 拓影·实测图 (1/4)

329は 瓦当から周縁部が斜めに立ち上がり、そこに珠文を配する。胎土は微砂粒を含み精良である。黒灰色を呈する。330は外区に珠文を配するが個数は不明。胎土は砂粒を含む。331は土壙500出土。胎土は粗く9mm以下の小石を含む。二次焼成によりにぶい黄橙色を呈する。

巴文軒丸瓦 (325・326)

325は溝200第1層出土。右巻きの三巴文である。周縁は高く、外区に珠文を配する。二次焼成によりにぶい橙色を呈する。326は土壙356出土。右巻きの三巴文である。胎土は微砂粒を含むが精良である。二次焼成によりにぶい黄橙色を呈する。

単弁十葉蓮華文軒丸瓦 (328)

土壙500出土。胎土は粗く、白色砂粒を多く含む。瓦当裏面に布目痕が認められる。一本造りである。二次焼成により灰黄褐色を呈する。

複弁六葉蓮華文軒丸瓦 (332・333)

332は溝200第2層出土。瓦当表面の一部が剝離したものである。周縁部は低く、珠文とほぼ同じ高さである。胎土は白色砂粒を多く含み、橙白色を呈す。二次焼成を受けている。333は溝200第1層出土。瓦当の中房部分のみである。1+4の蓮子を配する。胎土は精良で、焼成も良好である。

幾何学文軒平瓦 (334)

溝200第1層出土。斜格子文を配し、格子の中に菱形もしくは紡錘形を配する。外区に一部珠文が確認できる。瓦当顎部は横方向のヘラ削り、平瓦部凹面は細かな布目痕が残る。平瓦部凸面には唐草文軒平瓦の範によるタタキ痕が確認できる。胎土は微砂粒を含むが精良で焼成は良く、外面は黒灰色を呈する。半折り曲げ技法。山城産。^{註5}

唐草文軒平瓦 (335~337)

335は土壙419出土。瓦当顎部は横方向のヘラ削り、平瓦部凹面は布目痕を消すようにナデを施し、凸面は指押え痕が残る。胎土は微砂粒を含み精良。二次焼成により橙灰色を呈する。336は土壙500出土。瓦当部上端部は横方向にヘラ削りし、側面は縦方向のヘラ削りを施す。平瓦部凹面の布目痕は粗い。平瓦部凸面は指押え痕が顕著に残る。胎土は微砂粒を含み精良。二次焼成により一部にぶい黄橙色を呈する。337は土壙430出土。瓦当顎部と瓦当部上端部は横方向のヘラ削りを施す。瓦当裏面及び平瓦凸面に指押え痕残る。胎土は精良で黒灰色を呈する。半折り曲げ技法。栗栖野産。^{註6}

平 瓦 (338・339)

338は土壙414出土。平瓦凸面部に剣頭文軒平瓦の範によるタタキ痕が確認できる。胎土は砂粒を含み精良。二次焼成によりにぶい黄橙色を呈する。339は溝200第1層出土。平瓦部凸面に格子状のタタキ痕が確認できる。平瓦部凹面は細かな布目痕が残る。胎土は白色微砂粒を多く含む。

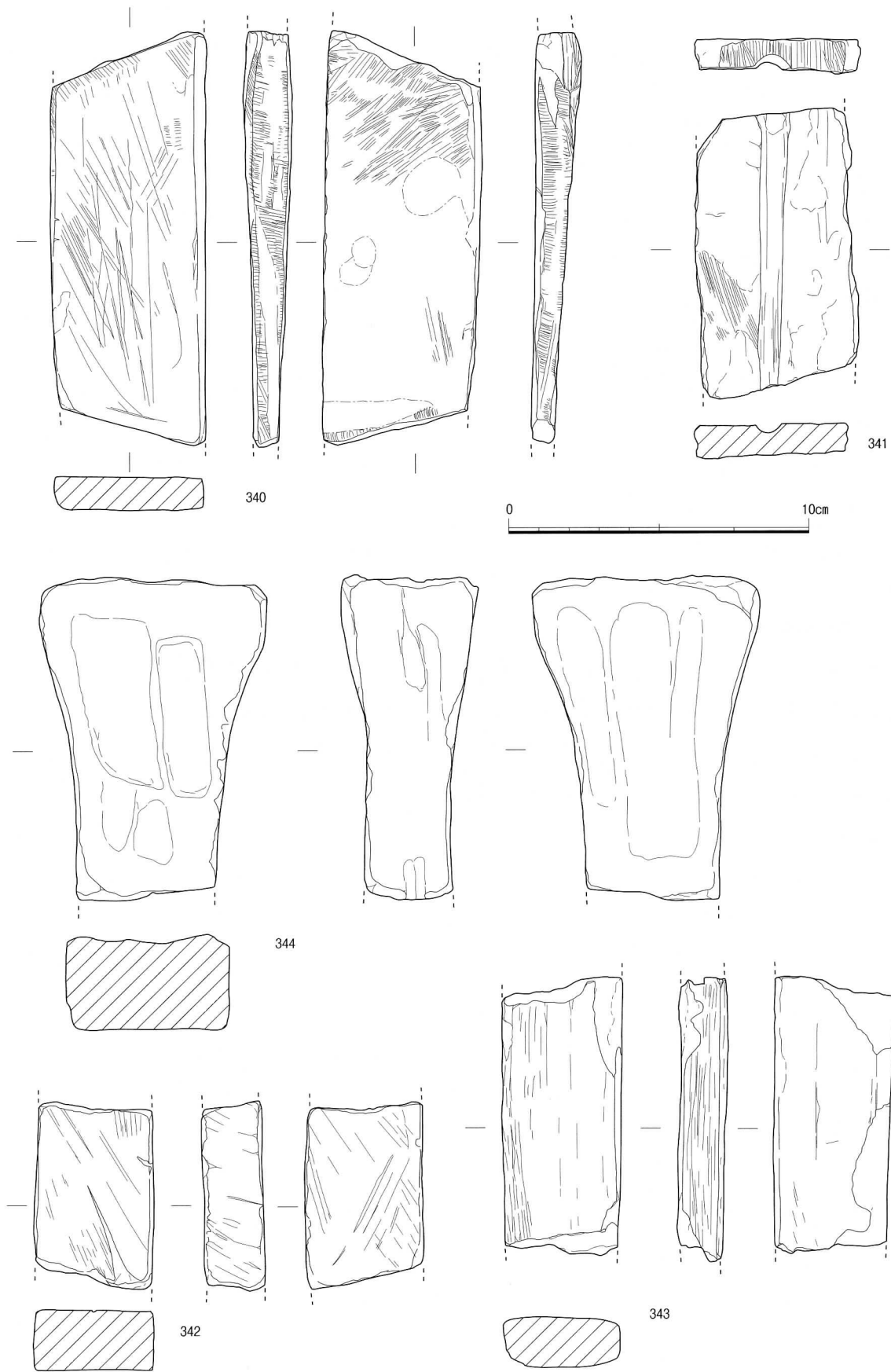


图29 石製品実測図 (1) (1/2)

石製品 (図29~31・図版14・15)

砥石 (340~344)

340は土壙11出土。両面および側面を砥石として使用する。擦痕が認められる。残存長13.8cm、幅5.1cm、厚さ1.6cmを測る。341は江戸時代の土壙16出土。片面と側面および縦方向の幅0.8cmの溝を砥石として使用する。残存長9.8cm、幅5.2cm、厚さ1.1cmを測る。342は溝305最下層出土。両面および側面を砥石として使用する。残存長6.3cm、幅4.0cm、厚さ2.0cmを測る。343は溝305精査中出土。両側面を主に砥石として使用する。残存長9.3cm、幅4.0cm、厚さ

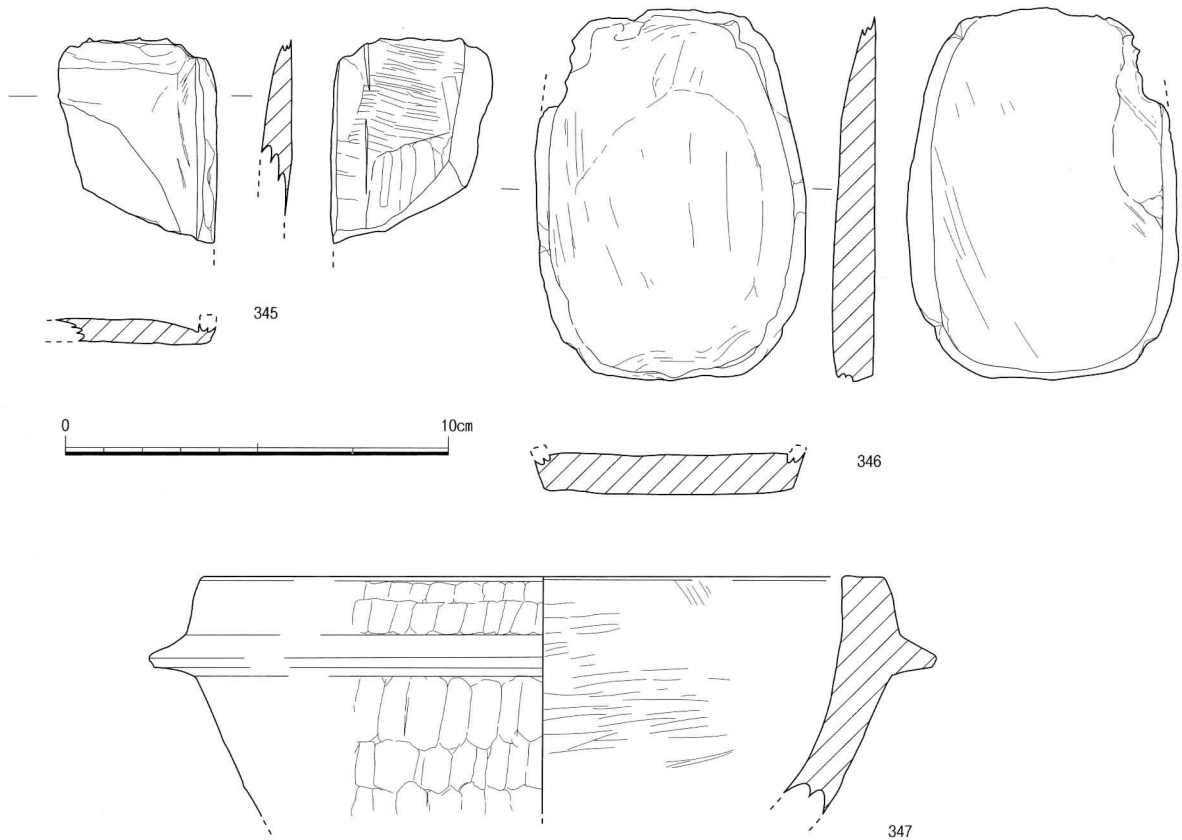


図30 石製品実測図 (2) (1/2)

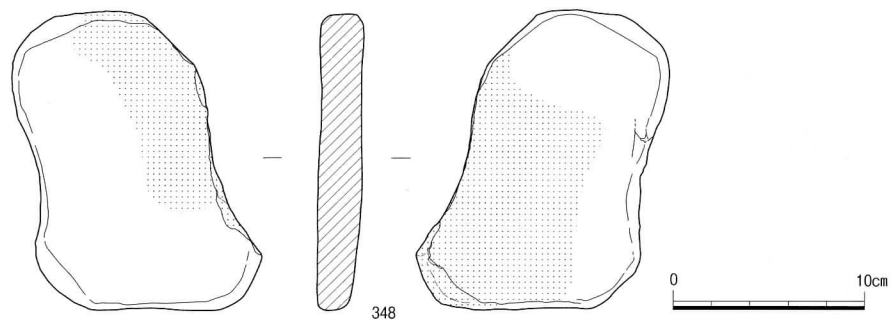


図31 堰石実測図 (1/4)

1.5cmを測る。344は石組294掘形出土。両面に加工痕が確認できる。表面のキメが粗いが砥石とみられる。残存長10.8cm、最大幅7.7cm、厚さ2.9～4.5cmを測る。

硯 (345・346)

345は溝200第2層出土。一部に墨が確認できる。残存長5.4cm、幅4.2cm、厚さ0.8cmを測る。346は土壙42出土。四隅を入り隈に作る。硯面と側面に墨が確認できる。残存長9.7cm、幅7.0cm、厚さ1.1cmを測る。

滑石製羽釜 (347)

鎌倉時代の土壙165出土。口径18.0cm。口縁部は肥厚し、端部は平坦面を設ける。外面には煤が付着し、縦方向の細かな加工痕が確認できる。

堰石 (348)

溝200西端部出土。扁平な河原石である。長さ15.7cm、幅11.8cm、厚さ2.3cmを測る。両面に焼けた痕跡が確認できる。溝200が町尻小路東側溝に流入する時の水量調節のために設けられた堰板の支えに使用したと考えられる。

金属製品 (図32・33・図版15)

銭貨 (349～365)

祥符元寶 (349) は1009年初鑄。江戸時代の井戸44より出土。350～352は柱穴348より出土。天聖元寶 (350) は1023年初鑄。紹聖元寶 (351) は1094年初鑄。聖宋元寶 (352) は1101年初鑄。熙寧元寶 (353) は1068年初鑄。鎌倉時代の土壙415より出土。元豊通寶 (354) は1078年初鑄。江戸時代の土壙296より出土。紹聖元寶 (355) は整地層①より出土。大観通寶 (356) は1107年初鑄。柱穴395より出土。慶元通寶 (357) は1195年初鑄。溝304より出土。嘉定通寶 (358) は1208年初鑄。室町時代の土壙307第1層より出土。寛永通寶 (359) は1636年初鑄。江戸時代の井戸355より出土。寛永通寶は土壙14、土壙293第1層などからも出土している。360～365は土壙396出土の六道銭である。開元通寶 (360) は621年初鑄。元符通寶 (361) は1098年初鑄。咸平通寶 (362) は998年初鑄。元豊通寶 (363) は1078年初鑄。紹聖元寶 (364) は1094年初鑄。皇宋通寶 (365) は1038年初鑄。2枚の表を合わせて緡でつなぐ。6枚の両端はいずれも銭の背面となる。六道銭埋納の一つの形態と考えられる。

刀子 (366)

土壙348出土。残存長15.4cm、最大幅2.5cm、柄部分は6.0cmを測る。鉄製の刀子である。錆が付着し、当初の形が判然としない。

用途不明銅製品 (367)

溝200南肩精査中に出土。全体に緑青がふいているが一部に鍍金が残存する。飾り金具の一部とみられる。残存長6.9cm、径約0.5cmを測る。

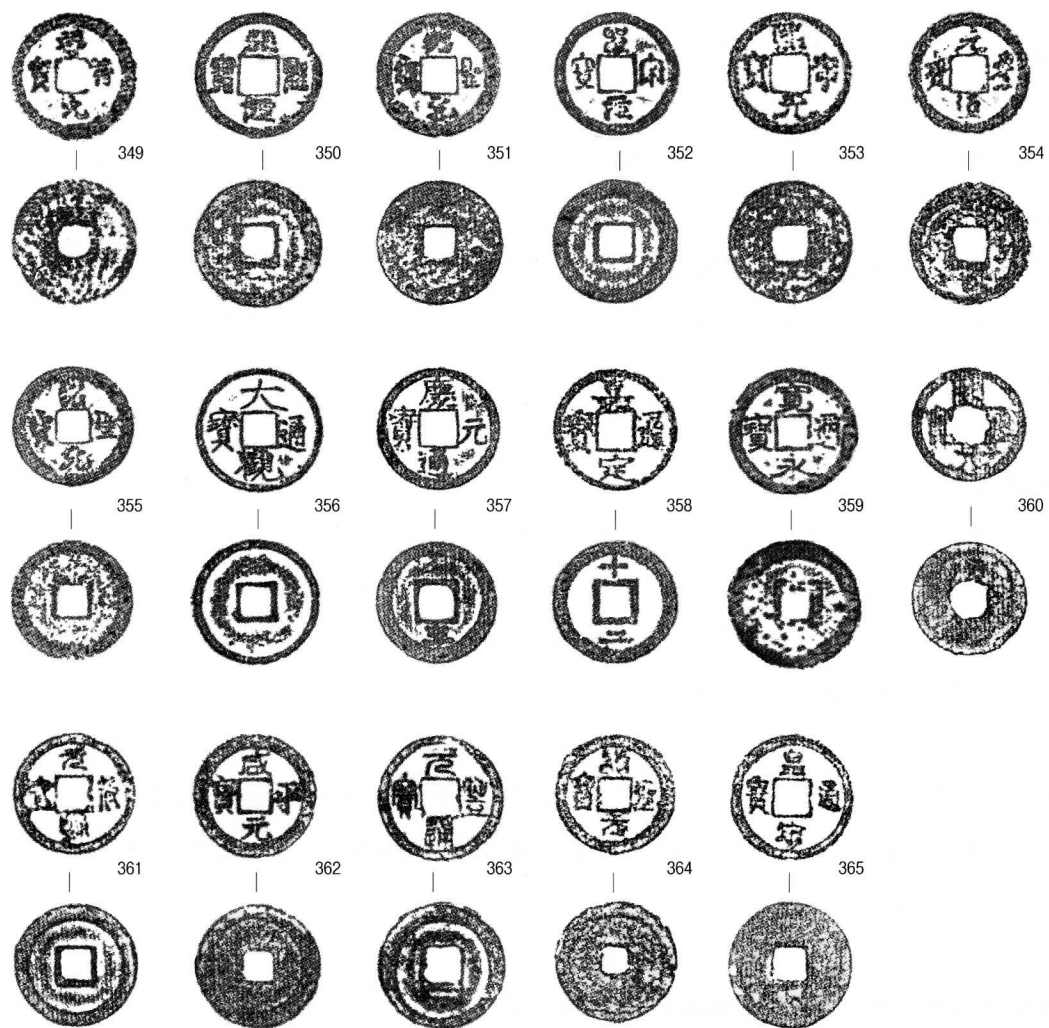


图32 錢貨拓影圖 (1/1.5)

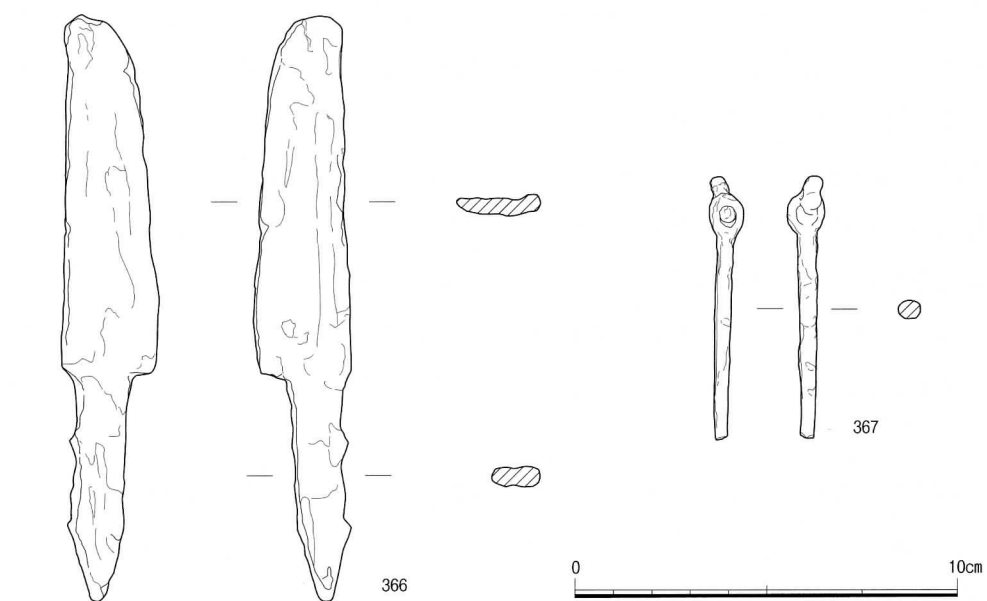


图33 金属製品実測圖 (1/2)

IV ま と め

今回の調査においては、弥生時代末期から古墳時代初頭にかけての堆積層、平安時代後期から鎌倉時代にかけての溝や土壇、室町時代の堀、江戸時代以降の井戸などを検出した。

1980・2008年度の調査では五町下層から弥生時代末期から古墳時代初頭の遺構が確認されている。今回の調査でも同時期の遺構の検出を念頭におき調査をおこなったが、明確な遺構は確認できなかったものの、浅い落ち込みの中から完形品を含む少量の土器を検出することができた。

平安時代後期の溝200は幅2.2～3.0m程の東西方向の大溝で、その位置は五町の南北のほぼ中心部に位置する。同規模と考えられる町尻小路東側溝に、流入口に堰を設けるなど水量調整をしながら流れ込む造りとなっている。この溝は宅地割の区画溝としては規模が大きく、園池に伴う遣り水跡の可能性が考えられる。つまり、文献史料にはこの時期に五町に邸宅等の記述は見当たらないが、この地の住人が一町を占める宅地を占有していた可能性がある。また、溝200第1層で検出した焼土は土壇500の焼瓦溜まりや、調査区西半部で確認した焼土面と同じものと考えられる。この焼失後、室町期に新善光寺の堂宇が再建されるまでは、土地活用が希薄であったことがうかがえる。室町時代に入り、元は五条橋西詰の南側にあった御影堂新善光寺が享禄2年(1529)にこの地に再建される。溝305、井戸345はこの新善光寺に伴うもので、新善光寺の伽藍を想定する上で資料となり得るものであった。

溝200出土軒平瓦(334)、土壇414出土平瓦(338)について

溝200第1層から出土した幾何学文軒平瓦(334)は、平瓦部凸面に唐草文軒平瓦の範によるタタキ痕が確認できる。この範は法成寺跡から出土した瓦文と類似している。(木村^{註7}875)土壇414から出土した平瓦(338)は、平瓦部凸面に剣頭文軒平瓦の範によるタタキ痕が確認できる。

このような瓦凸面に瓦範を用いたタタキ痕を残す事例として、常盤仲ノ町集落跡SK-1・22出土土丸瓦がある。^{註8}丸瓦凸面全体に唐草文軒平瓦の範によるタタキをもつ。タタキの間隔は不揃いで、文様の重複する部分も多く、傾きも一定ではない。本調査出土334も同様にタタキの間隔が不揃いで、文様の重複が確認できる。338も同様に文様が重複し、タタキの傾きも一定ではない。

瓦凸面に瓦範を用いたタタキ痕を残す事例は、常盤仲ノ町集落跡の1例と今回調査の2例を含めて3例である。半折り曲げ瓦・幾何学文軒平瓦(334)及び剣頭文叩き・平瓦(338)はともに山城産とみられ、瓦窯生産の地において叩き板として瓦範の再利用を行ったものと考えられる。

以上、今回の調査では、これまで文献史料などがなく平安時代から鎌倉時代においては不明な点の多かった五町内の一端を窺い知ることができた。しかしながら、今回の調査成果では五町内における邸宅跡などの宅地利用の様相まではわからなかった。また、烏丸綾小路遺跡の遺構の広がりの確認も今後の課題として残った。五町内における今後の調査に期待したい。

- 註1 『角川日本地名大辞典 26京都府』角川書店 1991年。
『日本歴史地名体系27 京都市の地名』平凡社 1979年。
- 註2 1980年度調査『昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2008年。
- 註3 2008年度調査『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-9 平安京左京五条三坊五町跡・烏丸綾小路遺跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2008年。
- 註4 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第3号』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年。
- 註5 『木村捷三郎収集古瓦図録』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年。
- 註6 註5と同じ。
- 註7 註5と同じ。
- 註8 『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告書 京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅲ』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年。

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうごじょうさんぼうごちょう・からすまあやのこうじいせき
書名	平安京左京五条三坊五町・烏丸綾小路遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	水谷明子
編集機関	古代文化調査会
所在地	〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404
発行年月日	2013年9月9日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
へいあんきょう 平安京 さきょうごじょう 左京五条 さんぼうごちょう 三坊五町・ からすまあやのこうじいせき 烏丸綾小路遺跡	きょうとし 京都市 しもぎょうく 下京区 しんまちどおり 新町通 たかつじさが 高辻下る みかげちやう 御影町 ほか 455他	26100	712	35度 59分 58秒	135度 45分 25秒	2013.01.18 ～ 2013.03.28	233㎡	マンション 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京左京五条三坊五町・烏丸綾小路遺跡	都城跡 集落跡	弥生時代末～古墳時代 平安時代～鎌倉時代 室町時代 江戸時代	落ち込み 溝、土壇、柱穴 堀、井戸、土壇 土壇、井戸	土師器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、土製品、瓦類、石製品、金属製品	平安時代後期の東西溝、平安時代～室町時代の町尻小路東側溝

	Aランク 点数 (箱数)	内 訳	Bランク (箱数)	Cランク (箱数)	出土箱数 合計
点数及び箱数	367点 (11箱)	土師器228点、白色土器3点、黒色土器5点、緑釉陶器3点、瓦器19点、灰釉系須恵器3点、灰釉陶器9点、青白磁2点、青磁8点、白磁33点、焼締陶器3点、国産陶磁器5点、土製品1点、瓦17点、石製品9点、銭貨17点、金属製品2点	136箱	0	147箱

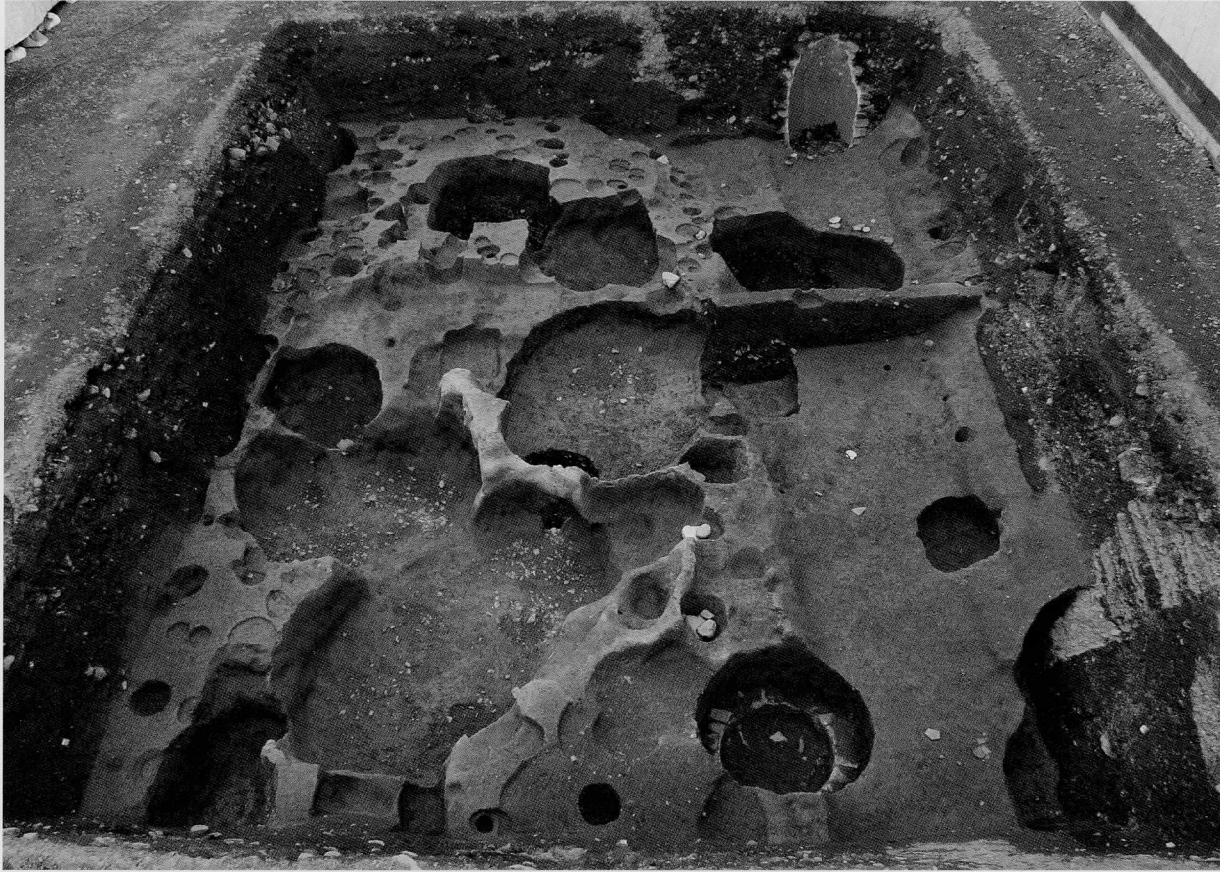
版 圖



1 東半部第1面全景（東から）



2 東半部第2面全景（東から）



1 東半部第3面全景（東から）



2 土壙34（南から）



1 東半部 溝200 (西から)



2 東半部 南西部柱穴群 (北東から)



1 西半部第1面全景（東から）



2 西半部第2面全景（東から）



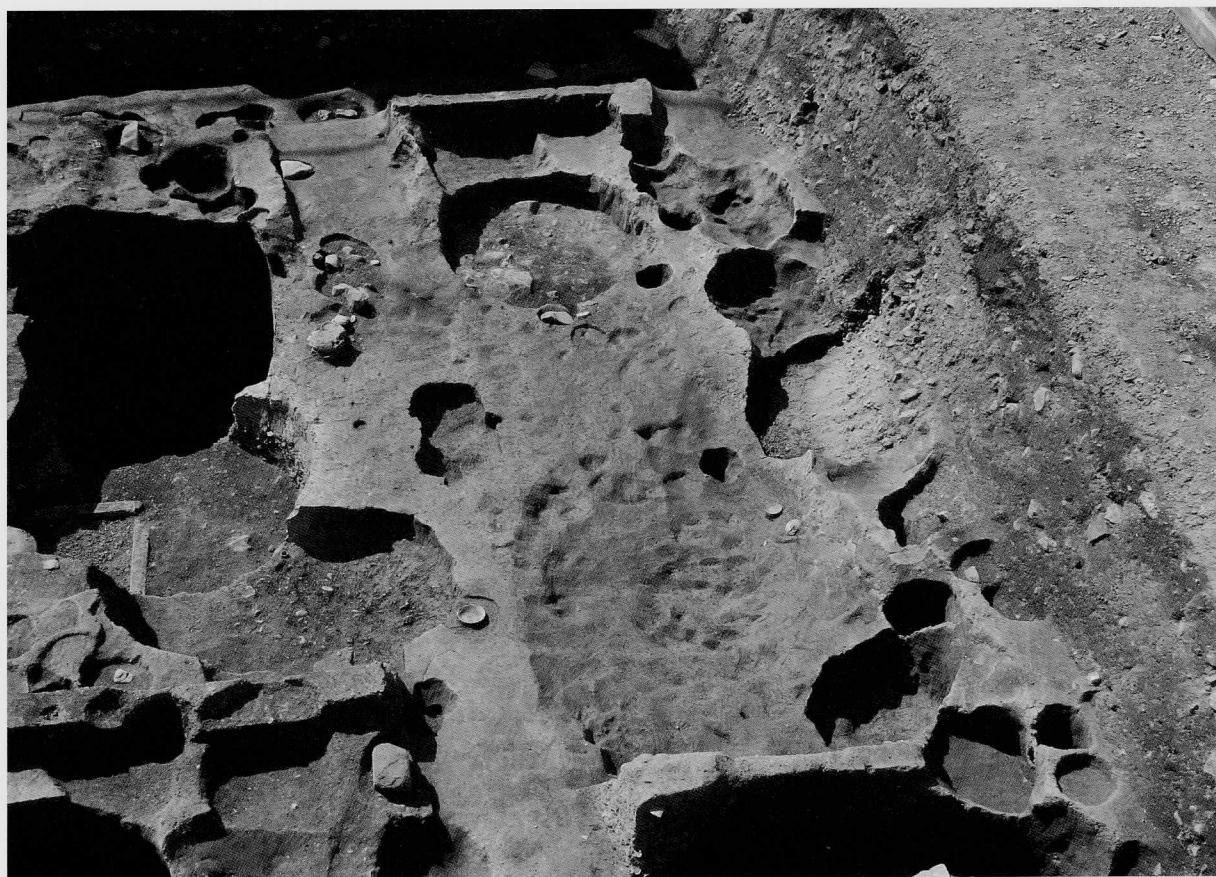
1 西半部第3面全景（東から）



2 石組294（北から）



1 溝305 (南から)



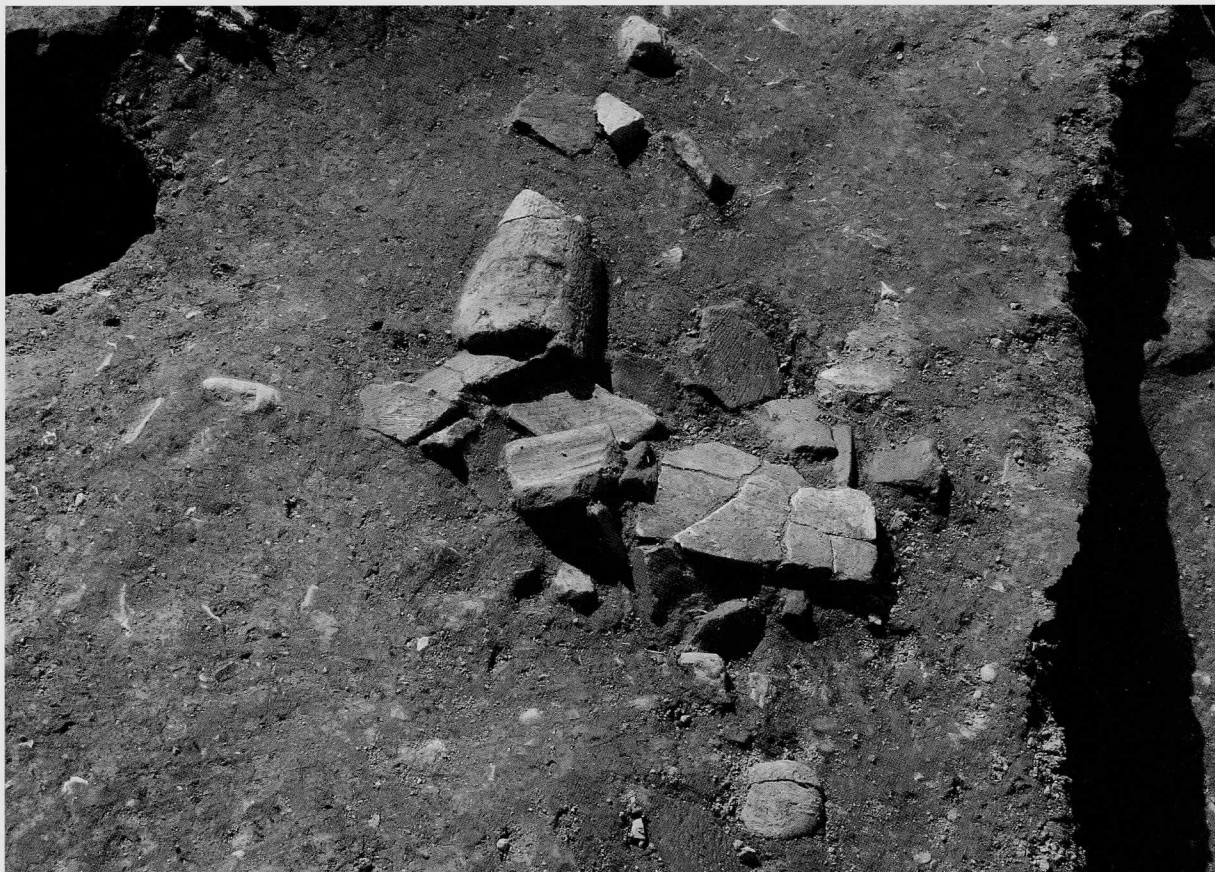
2 西半部 溝200 (東から)



1 溝200西端部（南東から）



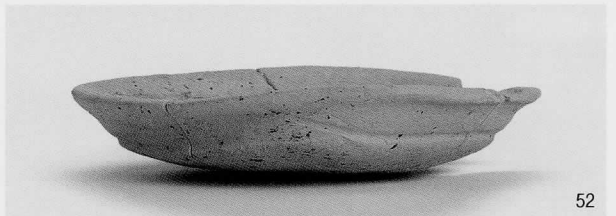
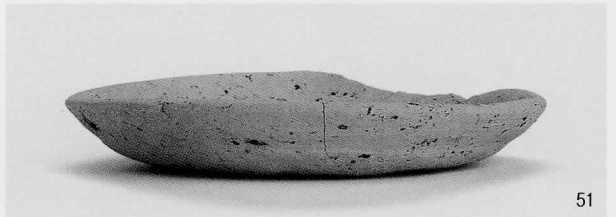
2 柵3・溝433（北から）



1 土壙500焼け瓦出土状況（東から）



2 溝433（南東から）



落ち込み578 (2)・埋納遺構577 (3)・溝200 (11・12・15・17・20・22・31・33・34・45・51・52・55)
出土遺物



59



94



61



75



123



81

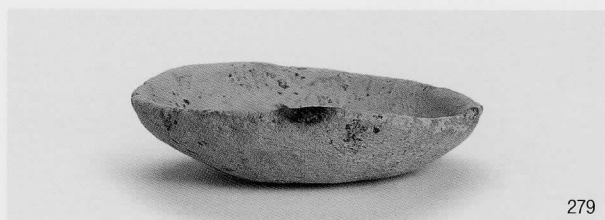


200



207

溝200 (59 · 61 · 75 · 81 · 94 · 123) · 柱穴409 (200) · 土壙396 (207) 出土遺物



土壙34 (253 · 254 · 256 · 257) · 土壙11 (261 · 263 · 266 · 271) · 土壙26 (279 · 281 · 292) ·
土壙10 (315 · 316) 出土遺物



土壙10 (317·318) · 溝200第1層 (319·325) · 土壙307 (320) · 溝200北肩 (321) · 柱穴336 (323) · 溝200第2層 (324) · 土壙356 (326) 出土遺物



327



331



328



332



329



333



330



335

溝200第1層 (327 · 329 · 330 · 333) · 溝200第2層 (332) · 土壙500 (328 · 331) · 土壙419 (335) 出土遺物



338



334



340



336



341



337



342

溝200第1層 (334) · 土壙500 (336) · 土壙430 (337) · 土壙414 (338) · 土壙11 (340) · 土壙16 (341) · 溝305最下層 (342) 出土遺物



溝305精査中 (343)・石組294掘形 (344)・土壙42 (346)・土壙165 (347)・溝200西端部 (348)・
土壙348 (366) 出土遺物

平安京左京五条三坊五町・烏丸綾小路遺跡

発行日 2013年9月9日

編集
発行 古代文化調査会

住所 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404
TEL (078)857-6368

印刷 真陽社

〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL (075)351-6034